

■ 発行／神戸市灘区六甲台町1
りくそうかい
 神戸大学農学部内 六篠会
 (神戸大学農学部同窓会)
 ■ 連絡用 FAX : 078-881-2752
 ■ E-mail : ans-rikusou@edu.kobe-u.ac.jp

六篠会報

神戸大学農学部創立60周年記念号



● 六篠会長の挨拶	2	● 六篠会代議員総会報告	16
● 学部長の挨拶	3	● 六篠会からのお知らせ	17
● 神戸大学の近況報告	4	● 研究室紹介	18
● 神戸大学農学部創立60周年記念事業報告	5	(1)環境分子物理化学	18
● 学友会だより	9	(2)動物遺伝資源開発学	19
● KUCだより	9	(3)地域共生計画学	20
● 支部だより	9	(4)食料情報学	21
(1)延喜会	9	(5)植物栄養学	22
(2)KOBÉ 六篠会	10	● 20年度庶務報告	23
(3)兵庫県六篠会	10	(1)役員・代議員	23
(4)六篠会関東支部	11	(2)慶弔関係	23
(5)六篠会東海支部	11	(3)退職、着任の教員紹介	23
(6)六篠会広島県支部	11	● 20年度決算報告	24
(1)武 正興	12	● 21年度事業計画・予算	24
(2)田中 易	13	● 同窓会事務局の案内	24
(3)伊藤 一幸	14	● 編集後記	24
● 第4回ホームカミングデイの開催	15	● 農学部創立60周年記念事業の醸金者一覧	別紙

CONTENTS

会長挨拶

六篠会会長

北浦 義久



六篠会会員の皆さん、お元気でご活躍の事と、心からお慶び申し上げます。

常日頃、六篠会活動に対しまして、深いご理解とご支援、ご協力を賜り、有り難うございます、深く感謝申し上げます。

わが母校、神戸大学農学部も丹波篠山の地で、昭和24年兵庫県立農科大学として呱呱の声をあげてから60年(人生にたとえれば還暦にあたる)節目の年を迎えました。

振り返ってみますと、第2次世界大戦後の混乱が続く中で設立された大学、多紀連山に囲まれた篠山盆地の一角で、農学の研究そして教育に取組み、年々その内容を充実すると共に、昭和32年には、兵庫県立農業短期大学と合併、昭和41年には国立神戸大学への移管が決定し、創立20年にあたる昭和44年、神戸六甲台に神戸大学農学部として、新たなスタートを切りました。

その後、大学院修士課程、さらに、博士後期課程、平成19年には、待望の大学院農学研究科が設置されるとともに、学部の改組や学舎の全面改良に加えて施設の充実が図られる等、名実共に、他大学に比して、遜色のない農学部へ成長してまいりました。

神戸大学農学部をここまで育て上げられた、諸先生方を始め、大学関係者の皆様の努力に対し、心から敬意を表し、深く感謝申し上げたいと思います。

この60年を祝し、さらに、今後の飛躍発展を念じ、去る10月31日午後大学の学舎に於いて、「神戸大学農学部創立60周年記念式典」が、ご来賓を始め、現、旧職員の方々、同窓の六篠会会員、現役の大学院生及び学生等、二百数十名の参加のもと、盛大に挙行されました。

式典では、ご来賓を始め多くの方々から、60年の歴史を振り返り、農学部の果たしてきた役割、そして、21世紀、これからの農学部への期待等、数多く語られ、感銘深い有意義な集いでした。

記念講演会では、学術講演として、青山学院大学教授の福岡伸一先生の

「命を解くキーワード、それは 動的平衡」
一般講演として、作家の玉岡かおる先生の

「みどりの民の挑戦の跡、国を支えた農の魂」
それぞれ感銘深い、お話をお聞きし、感動いたしました。

さらに、祝賀会では、大学長の福田先生、元学長の新野先生を始め、他の学部の先生方にもご臨席賜り、歓談、交流の輪が大きく広がりました。

又、丹波篠山デカンショ節保存会の皆さんのよる「デカンショ節と踊り」も披露される等、和気あいあいの中で、有意義な祝宴となりました。

六篠会としても、この節目の年を記念して、大学への具体的な支援が出来ればと考え、役員会で協議検討を重ねると共に、大学側とも協議し、農学部として、今後、さらに元気を出してもらうため、学生や大学院生、並びに教員の中で、優秀な成績や成果をおさめられた方を対象に、その功績を讃え、賞「六篠賞」を贈ることと致しました。

今年度から実施することとし、準備を進めて参りますので、ご理解ください。

この他、記念事業の一環として、神戸大学農学部60年の歩みを取りまとめた「農学部60周年記念誌」を刊行し、希望者の皆さんに配布しました。

この記念事業の実施に当たり、六篠会会員の皆さんには、貴重な浄財を拠出頂き、お陰で無事、事業を終えることが出来ました事、心から感謝申し上げます。

皆さんの他にも、多くの団体や企業にもご支援を頂いたことを、ご報告しておきます。

以上の60周年行事の他、恒例の支援活動への支援を続ける一方、大学の他学部同窓会との交流を深めるため、全学的なホームカミングデー、KUC活動、さらに、学友会活動にも積極的に参加して参りました。

最後になりましたが、国内はもとより、海外に飛躍され、それぞれの分野で活躍されている六篠会会員の皆さんと共に、60年を契機にさらに、交流を深め、頑張っていきたいと念じております。

会員の皆さんの、ご健勝とご多幸をお祈り申し上げ、ご挨拶とします。

農学部近況報告 09

大学院農学研究科長・農学部長

内田 一徳



仲秋の名月が美しい良い季節を迎え、六篠会会員の皆様には益々ご清祥にご発展のこととお慶び申し上げます。

今年は農学部創立60周年、還暦のお祝いの年です。同じ還暦を迎える私が、中村先生の後、農学研究科長・農学部長を仰せつかりました。どうかよろしくご支援ご鞭撻くださいますようお願いいたします。

今年は、オバマ大統領就任や民主党政権誕生など、大きな変革の年になりましたが、会員の皆様には、農学部の明るい元気なニュースをお届けしたいと思います。

まず、60周年関連ニュースからです。これまでの卒業生・修了生の総数は、9,000名を超えました。兵庫農科大学の卒業生は約1,260名、農業短期大学の卒業生が約300名、昭和41年から平成20年までの農学部卒業生は約5,740名、博士前期課程修了生は約1,470名、博士後期課程修了生は約270名、合計9,040名に達しています。神戸大学農学部が幾多の変遷を経ながら特色のある研究と教育を通じて、各界へ多数の有為な人材を送り出し、農業・農学の進歩と社会の発展に貢献してきたことは、広く社会の認めるところであり、我々の誇りとするところです。60周年関連記事が10月30日神戸新聞朝刊に掲載されたので、ご覧いただいた方も多くあったかと思えます。いよいよ31日に記念式典・記念講演会・祝賀会が開催されます。多くの方々に支えられて、皆さんの記憶に残るいい会になりますことを祈念しています。

次は、うれしい受賞のニュースです。昨年11月に、杉本幸裕先生が「植物化学調節学会賞」、福田伊津子先生が「第47回日本栄養・食糧学会近畿支部大会若手奨励賞」、12月に石井弘明先生が「第7回日本農学進歩賞」、本年4月に芦田均先生・吉田健一先生が「2008年日本農芸化学会英文論文賞」、6月に井上一哉先生が「地盤災害減災のための予測・シミュレーション国際会議若手研究者賞」、7月に水野雅史先生が「森喜作賞」、8月に田中丸治哉先生が「農業農村工学会学術賞」、9月に小野雅之先生が「日本農業市場学会賞」を、それぞれ受賞されました。誠にめでたうございました。益々のご精進とさらなるご発展を祈ります。

次は、教育関係のニュースです。農学部では、これまでも積極的に国際連携教育を推進してきました。平成17～20年に文科省採択で実施してきました「大学教育の国際化推進プログラム(戦略的国際連携支援)」は、本年3月16-17日に瀧川記念会館においてアジア農業国際シンポジウムAISAを開催して締めくくりました。これに続いて、現在、九州大学や東京農工大学、ドイツのホーエンハイム大学、タイのカセサート

大学・チェンマイ大学とともに、文科省採択の国際化加速プログラム「国際農学教育共同プラットフォームの構築(平成20-22年)」を実施中です。遠隔講義システムやリレー講義、講義コンテンツの共同利用などの新しい国際農学教育システムを実践しています。本年9月初めに国際化加速プログラム中間会議がタイのチェンマイで開催され、計画段階から実施段階へ移行することになっています。11月24-26日に開催されます神戸大学Week2009でもこの成果を活かすべく、「国際農学教育共同プラットフォームとアジア版エラスムス計画」と題した農学部独自の国際シンポジウムを11月25日15:00-18:00にB101教室にて開催する予定です。また、「食料危機に備え資源保全をEUに学びアジアに活かす国際農業戦略の実践的トレーニング」であるITP(International Training Program)事業(H19-24)では、昨年度は4名、今年度は3名の若手研究者をEUおよびアジアに派遣し、食料危機に備えて国際農業戦略を学び、成果を農業教育研究に活かしてくれることを大いに期待しています。

続いて研究ニュースです。昨年度から採択されました文科省振興調整費JST「バイオプロダクション次世代農工連携拠点」プロジェクトには、農学研究科から4グループ12名の教員が参加して、順調に研究が進行し、参加企業も11月からは13企業に増えると同っております。来年度に中間評価を受け、採択中の3プロジェクトの中で1つだけが継続されるそうで、この中間評価が通ると、10年間で総事業資金として150億円以上が投入されることになります。さらに、同じくJST地球規模課題対応国際科学技術協力事業として、杉本幸裕先生が中心となって、「根寄生雑草克服によるスーダン乾燥地農業開発」と題したプロジェクト(総額約5.3億円)が採択されました。本プロジェクトは、11月の協定書調印後に本格稼働する予定とお聞きしております。その他、来年度3月完成予定の自然科学系4号棟に入居予定の5つの重点研究チームや、若手中堅研究者の「インターゲノミクス」研究会も、順調に研究を継続しています。

さて、本年10月4日の朝日新聞全国紙朝刊の中央見開き2頁をご覧いただいた方も多いかと思いますが、全国農学系学部長会議71メンバーが参加した朝日新聞社地球環境フォーラム協賛広告と、「『小さな地球』無限の可能性」と題した座談会記事が掲載されました。詳しくは、以下のURLをご覧いただきたいと思えます(<http://www.ans.kobe-uac.jp/zenkokounougakukei.html>)。

最後になりましたが、六篠会のますますのご発展と、六篠会会員の皆様のご健勝とご発展を心から祈念いたします。

(10月寄稿)

神戸大学の近況報告:国際化と産学官連携

理事・副学長 中村千春

六篠会会員の皆様にはお変わりなくご清祥のことと存じます。さて、高山の峰々はすでに白雪をまとい冬が近づいています。学生諸君の深刻な就職難など不況で財布の中には寒風が吹き荒れそうですが、せめて心持ちは温かく健康でありたいと思います。

私は、平成17年から4年間、六篠会会報を通じて皆様に農学部・農学研究科の近況報告を申し上げて参りました。今年も、国際・産学官連携担当理事の立場で、六篠会会員の皆様に大学の近況をお知らせ致したいと思います。

まずは、大学の国際化についてです。今年の前半から、日本の大学は国際化の波に揉まれています。高等教育にもグローバル化の波が押し寄せ、流動化が高まる優秀な留学生の獲得に危機感を抱いた日本は、文科省など6省の共同作業で、「留学生30万人計画」を平成20年7月に策定しました。この国際化拠点整備事業(グローバル30)は、大学を機能別に分けるという施策のひとつで、全国の国公私立大学から「国際化の拠点となる大学を30選定し重点的に育成する」ことが決定されました。公募・審査要領が発表されたのは本年4月の末でしたが、国際化をキーワードとする神戸大学は、トップ30を目指して急遽、体制作りに取り組みました。結局、国立大学法人7校と私立大学6校が選ばれ、残念ながら神戸大学は善戦及ばず選定から外れました。落選の憂き目を見た各大学とハードルの高さにひとまず挑戦を控えた大学は、6月以降、次年度の採択に向けて走り出したところでした。

こうしたなか、グローバル30事業は、見直しにより、残り17校への予算配分が凍結に至りました。国家支援なしに自助努力のみで「国際化」を進めるのは困難です。す、「国家戦略」なくして実効は期待できません。「政府による大学国際化への財政支援」が早急に策定されることを切望いたしますが、今暫くは、各大学の自助努力によりこれを押し進める他ありません。幸い、神戸大学は国際都市神戸に位置する地の利をもつ

ています。これまで国際的な交流を地道に続けてきました。これからも、個人、部局・大学・大学間など様々なレベルで神戸大学らしい国際化を目指していきたいと思います。農学部・農学研究科には、内田研究科長のもとで国際学術交流事業をさらに押し進め、神戸大学国際化の先頭を切って頂きたいと思います。

次は、産学官連携に関するニュース2つです。本年6月、神戸大学は、大阪大学、兵庫県立大学、大阪府立大学とともに、文科省と経産省が共同実施する「産学官連携拠点事業」のうち全国5つの「グローバル拠点」のひとつに選定され、「関西バイオメディカルクラスター」事業を担うことになりました。農学部・農学研究科は、食の安全安心科学、ヘルスバイオサイエンスや農工連携プロジェクトを推進することでこの事業に貢献できると思います。さらに、神戸大学は平成23年度、神戸ポートアイランドに統合研究拠点を開設する予定です。本拠点では、学外の研究機関、他大学、産業界と連携して全学の先端融合研究と産学官連携を推進することになっています。同地区には大型計算機(スパコン)が建築中で、「関西バイオメディカルクラスター」事業や工学部キャンパスに平成22年4月の設置が決まった新研究科(システム情報学研究科)も併せて、神戸大学の新しい学術研究が展開されると期待しています。

ご報告は以上です。最後になりましたが、六篠会のみならずの発展と六篠会会員の皆様のご健勝と安寧を心より祈り申し上げ、加えて神戸大学と農学部・農学研究科への変わらぬご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。



『神戸大学農学部創立60周年記念事業』が盛大に開催 ～神戸大学農学部の飛躍的發展と同窓生の連携のために～

創立60周年記念事業総括委員長
代表理事 **中村 直彦** (神1回)

神戸大学農学部が創立60周年の記念すべき行事を、平成21年10月31日(土)、農学部学舎において盛大に実施しました。

戦後復興の曙期にあった昭和24年、丹波篠山町に兵庫県立農科大学として開学し、同41年に国立移管で神戸大学となった農学部は、幾多の変遷を経て大学自体も大きく変革し、充実・発展してまいりました。これは、ひとえに、歴史を作り伝統を築かれてこられた多くの先輩諸氏の功績と社会の各界で活躍中のたくさんの卒業生の皆様のご理解とご支援の賜物であり、敬意を表すとともに深く感謝いたしております。

このたび、創立60周年という節目にあたり、現在の大学の姿を多くの皆様に見ていただくとともに、同窓生の皆さん方と大学の関係者が一同に会し、農学部60年の歩跡を振り返り、「食料・環境・健康生命に寄与する農学は、今後どうあるべきか?危機に直面している日本農業をどのように展望していくのか?」、さらに「これからの厳しい時代、人生をどう考え・生きぬいていくのか?」を大いに語り、相互に連携し懇親を深める機会といたしたいと開催いたしました。

大学を思う同窓生、そして現・旧の教職員の熱い思い、強い気持ちで、この記念事業が成功裏に終わることができ、感謝の気持ちでいっぱいです。

たくさんの募金、そして記念行事へのご参加に対し、感謝とお礼を申し上げます。ほんとうにありがとうございました。また、一年がかりで本事業に携わっていただいた『神戸大学農学部創立60周年記念事業会』(委員名簿は末尾に記載)の大学教職員、六篠会役員や事務局を手伝っていただいた関係者の皆さん、ご苦勞様でした。

ここに、当日の事業の概要をご紹介しますとともに、その様子をご報告します。



記念式典の風景

1 記念事業・記念行事の概要

記念事業は、3部構成になっており、①記念行事の開催(記念式典、記念講演会、記念祝賀会)②記念誌・写真集「神戸大学農学部60年のあゆみ」の発行③募金活動の実施とい

った内容で取り組みました。対象を農学部同窓会「六篠会」の会員、農学部の現・旧の教職員、大学と関係の深い行政・団体・企業、さらには現在の学生と今年入学した学生の父兄にまで声をかけご案内いたしました。

当日は、天高く青空が広がり、日差しは強く、日中は暑いばかりの絶好の日和となりました。受付の用意が十分に整わない朝11時過ぎ頃から、同窓生が心臓破りの、あの農学部に通じる上り坂をC101大講義室を目指して登ってきます。

記念行事の内容は、①農学部創立60周年記念式典(午後1時30分より午後2時)②農学部創立60周年記念講演会(午後2時15分より午後5時15分)③農学部創立60周年記念祝賀会(午後5時30分より午後7時30分)と、予定どおり実施いたしました。



受付風景

1) 記念式典

まず、内田一徳農学研究科長の式辞で「農学部60年の歩みと、記念行事開催のお礼のことは」があり、次いで、中村千春神戸大学副学長から「これからの農学部・農学への期待」を込めての挨拶があり、さらに、兵庫県の伍々農政環境部長、神戸市の吉武産業振興局長から来賓挨拶がありました。最後に、六篠会の北浦義久会長より、「このたび創設した『六篠賞』の概要を説明するとともに謝辞」を述べて、厳かなる式典を閉じました。



内田研究科長の式辞

2) 記念講演会

講演は、2題を用意しました。

第一部は、分子生物学者で、青山学院大学教授の福岡伸一先生。著書は、「生物と無生物のあいだ」「もう牛を食べても安心か」「動的平衡」などを発表し、サントリー学芸賞、中央公論新書大賞など受賞。

また、第二部は、作家で、TVのニュース番組のコメンテーターとして馴染みがあり、日本河川協会理事、兵庫県美術館審議委員などを歴任されている玉岡かおる先生。神戸文学賞受賞の「夢喰い魚のブルー・グッドバイ」で文壇デビュー。「銀のみち一条」ほか、神戸の鈴木商店を扱った「お家さん」では織田作之助賞を受賞など多数。

ここに講演内容を簡単にご紹介しましょう。

①学術講演:演題「生命を解くキーワード、それは“動的平衡”」
《講演内容》現在、私たちの周辺で生命操作を巡る、遺伝子組み換え、クローン技術、臓器移植といった技術が議論されている。そこには、生命とは、マイクロ部品が集まってできたプラモデルであるという見方があり、今、そのパーツを組み替え、プログラムを戻し、遺伝子を切り貼りしている。しかし、私たちが食べた分子は、身体を構成する分子と絶えず交換され続けている。つまり、生命とは、プラモデルのような静的なパーツの分子機械ではなく、パーツ自体のダイナミックな流れの中に成り立っている効果そのものといえる。ルドルフ・シェーンハイマーは、生命が動的平衡状態にあることを最初に示したユダヤ人科学者である。そこで、生物を無生物から区別するものは何か?を“動的平衡”論とともに生命観について考察。

②一般講演:演題「みどりの民の挑戦の跡、国をささえた“農”の魂」

《講演内容》日本民族は、太古の時代より、森の中で、茸、木の実、山菜、獣などの食べ物を手に入れ、さらには、自然に甘んじることなく、自ら大地を耕して食料を確保してきた。兵庫県のため池の数は、日本一。天からの水を蓄えるため池は、豊かな環境を創出し水生動植物や鳥たちが生きていく舞台ともなっている。もちろん人間が餓えることなく暮らしていくための食料生産とあわせて農業土木といった技術は、知恵の集積そのものとなっていた。さらには、田植えの神事が、能や歌舞伎などの伝統芸能にまで発展するなど、農は、無数の知恵を触発し、様々な学問を生み出すことになった。しかし、ほんの半世紀前までの、“農業がすべての基盤である”といった農本主義が崩れ去り、今では、離農が進み、食料自給率は下がり、さらには“農”の魂そのものを忘れ去ろうとしている。未来の日本農業の行く末は…

3) 記念祝賀会

講演会のあと、席を変えて記念祝賀会の会場となっている大学生協LANSBOXへと、辺りが薄暗くなった道を急いだ。

『～萌える山並み♪ 行く雲に♪ 飛ぶ鳥を追う♪ 駆けてくる♪♪♪～』と“神戸大学学歌”のグリークラブの演奏が始まった。歌い終わると同時に、「ただいま、神戸大学農学部創立60周年記念祝賀会が開会いたしました。」と司会者の透き通るようなアナウンスが会場を駆け抜けた。埋め尽くした仲間から一斉に大きな拍手が鳴り響く。

いよいよ、同窓生と教職員、同窓生同士の間で、懇親・連携の場が始まる。

■挨拶・祝辞

まず初めに、主催者を代表し北浦義久六篠会会長より「このように盛大に記念行事を開催できたのは皆さんのお陰です。これからも大学を盛りたて、同窓生の連携を深めていきましょう。」

と挨拶。また、福田秀樹神戸大学学長から来賓を代表して祝辞をいただいたあと、ご来賓の皆さんが順次紹介されました。



北浦会長の挨拶



福田学長の祝辞

■鏡開き

次いで、いよいよ鏡開きです。内田一徳農学研究科長、北浦義久六篠会会長、福田秀樹神戸大学学長、新野幸次郎元神戸大学学長・元学友会会長、西川欣一初代六篠会会長、三十尾修司60周年記念事業会学内実行委員長、中村直彦60周年記念事業会総括委員長の7名による掛け声とともに威勢よく鏡開きが行われました。



関係代表者による鏡開き

■乾杯・祝宴

さらに、新野幸次郎元神戸大学学長・元学友会会長によるご祝辞と乾杯のご発声によって楽しい宴の時間が始まりました。

祝賀会では、食資源教育研究センター（前農学部附属農場）からの生産物が食卓を賑わしました。それは、東京で100グラム、数千円の値段がついて話題になったという“神戸大学ビーブ”、神戸大学と兵庫県が共同開発した酒造米を使った純米大吟醸酒“神戸の香り”や同センター産の米で造ったリングジュースのように飲みやすい“どぶろく”同じく“さつまいも”“柿”など。

その他、ご協賛によりいただいた神戸市役所の“神戸ワイン”、白鶴酒造株式会社の“樽酒”など豪華な料理や飲み物が並びました。



新野学長による祝辞

■祝電・協賛団体披露

多くの団体等から祝電と協賛をいただきました。ありがとうございました。

■テーブルスピーチ・余興

その後、テーブルスピーチのトップバッターは、兵庫農科大学・神戸大学の激動の時期に永年、教授であった丹下宗俊名誉教授から、次いで、昭和36年に農学科を卒業した酒井修氏から、さらに、加藤征史朗元農学部長から懐かしい思い出の数々が語られました。また、昭和24年、篠山の地で開学以来、青春を過ごし、歌い継いできた“兵庫農科大学学歌”をグリークラブが披露。そして、青春時代、歌い踊った方も多い“デカンショ

節”を篠山市デカンショ保存会の皆さんに披露していただきました。懐かしさのあまり、保存会の皆さんに交じって一緒に踊られる同窓生もあって、なごやかなうちに余興も終了しました。

■お別れ

宴もクライマックスに達したところで、いよいよフィナーレの時間がやってきました。『～静かな夜更けに♪ いつも いつも♪ 思い出すのは♪ お前のこと♪♪♪～』、グリークラブの“遙かなる友に”の歌声とともに、六篠会代表理事の中村直彦農学部創立60周年記念事業総括委員長より閉会の挨拶。「今日は、教職員の方々、旧教員、大学の関係者そして卒業生が一堂に会し、旧交を温めることができた。『六篠賞』の創設に見られるように、未来の農学部に夢があることを、また、これからの厳しい時代、われわれ同窓生が連携し新しい時代を切り拓いていくであろうことを、本日、ここに確信した。10年後に、20年後に再会できることを楽しみにしている。」と謝辞を述べ、お開きとなりました。



中村総括委員長による謝辞

II. 記念誌・写真集「神戸大学農学部創立60年のあゆみ」の制作と配布

農学部の60年の歴史を記録し、その時代の写真を懐かしく紹介した記念誌「神戸大学農学部創立60年のあゆみ」を制作し、ご醸金をいただいた方に記念品として、本記念誌「神戸大学農学部創立60年のあゆみ」を贈呈いたしました。

神戸大学農学部創立60周年記念事業会委員

農学部

内田 一徳 (研究科長)	小野 雅之	万年 英之
宮野 隆 (副研究科長)	川村 恒夫	川村 恒夫
北川 浩 (副研究科長)	高田 理	三十尾 修司 (学内実行委員長)
朴 杓允 (副研究科長)	田中 勉	岡山 高秀 (名誉教授)
伊藤 一幸	豊田 浄彦	堀尾 尚志 (前副学長)
宇野 知秀	藤嶽 暢英	中井 啓介 (農学研究科事務長)
宇野 雄一	保坂 和良	松本 敏幸 (前農学研究科事務長)

神戸大学

中村 千春 (副学長) 大野 隆 (全学共通教育部長)

六篠会

北浦 義久 (会長)	島原 作夫	能宗 康夫
中村 直彦 (記念事業総括委員長)	新家 龍	橋本 堂史
相野 公孝	菅原 通直	橋本 宏之
東 順三	武正 興	三浦 恒夫
石賀 暢一	竹中 慎治	三木 啓造
王子 善清	田中 平義	水野 雅史
大西 成己	辻 莊一	山本 博昭
久保 一兵	外山 眞理	吉倉 惇一郎
坂井 永利	内藤 親彦	
阪上 昭宏	西川 欣一	

農学部創立60周年記念事業を終えて

記念事業学内実行委員長

農学研究科 資源植物生産学分野 三十尾 修司

この度の創立60周年記念行事が盛会裡に滞りなく終わり、これも様々な場面でご支援、ご協力をいただいた方々のお陰であると深く感謝申し上げます。

そもそも、創立60周年事業を立ち上げるべく、当時の中村農学研究科長と北浦六篠会会長が話されたのが、平成20年5月頃と伺っております。農学部での準備委員会の立ち上げが7月24日となり、その時期はちょうど20年度のホームカミングデイの準備に追われ、なかなか60周年に本腰を入れられない状況でした。12月に入って六篠会の方々と具体的な相談がなされ、年末には趣意書の作成に入り、醸金募集(現教員、旧教員、卒業生、在学生ご父兄および協賛企業・団体とする)、講演会(学術講演と一般講演とし、全国的にも有名な福岡伸一先生と、玉岡かおる先生とする)、祝賀会(大学生協LANS BOXで開催する)および記念製作(記念誌および写真集の作成)が決まりました。

この趣意書を年明けの2月に現・旧教員、卒業生に発送させていただきました。在学生のご父兄と協賛依頼企業・団体様には4月以降の新しい農学部スタッフの名前でご送付の方が良いと考え、研究科長が内田一徳教授と変わったのをはじめ、新しい発起人メンバーを加えさせていただき発送いたしました。

醸金の期限は7月末日に設定いたしました。6月中までは出足が悪く、大変やきま致しました。6月に二度目のご案内を差し上げ、その甲斐あってか、7月下旬に参加のお知らせと醸金が殺到し、会計担当の竹中先生や六篠会事務局の中村女史には過重労働となってしまうと思っております。結局、式典・講演会の参加予定者が300名弱となり、C101大教室だけでは収容しきれないことがわかり、当初休憩場所に予定していたB101教室で急遽TV中継をする準備を致しました。このお陰で、農学研究科では初めて、教室間でのTV中継が可能であることが実証されることにもなりました。

一方、記念誌・写真集については新家先生をはじめ編集委員会の方々にすべてお任せしてしまいましたが、短い期間に非常にまとまりのある記念誌・写真集ができ上がり、編集委員と執筆者の方々に心から感謝いたしております。一般の方々は神戸大学の百年史冊子を手に取られる機会がほとんど無かったと思いますが、今回の記念誌では農学部に関する変遷がつぶさにまとめあげられており、写真集のページをめくるだけでも大変楽しい冊子になっています。

さて、準備が整い、当日は気持ちの良い快晴でありました。そのためか、農学部の催しは午後であるにもかかわらず、実行委員がまだ全員集合していない午前中から何人もの卒業生が学部を訪れました。

今回の行事では、まず、在学生のご父兄向けに、改修なった学舎の見学会を午前11時30分より1時間開催いたしました。予約は22組42人あり、中にはご両親とご親戚3人で参加されたりして、新しく明るいEラーニング室や学生実験室、分野研究室の雰囲気を実験され、ファイトロンや温室設備を熱心に見学されました。

総合受付が正式に始まった13時頃には来賓の方々、卒業生、参加者でいっぱいとなり、C101会場はほとんど人で埋め尽くされました。出席者は一般の市民も含め総勢約250名となりました。現役教員の方にはB101でのTV中継に廻っていただきました。

式典は、まず内田一徳研究科長の式辞に始まりました。兵庫農科大学にはじまる農学部の歴史と、現在、農学研究科が置かれている状況を述べられ、食料の安定供給、環境の保全、新規バイオ産業の創成および食の安全安心に向けた科学技術の開発など、これからの農学が社会に果たすべき役割を全力で担う決意を述べられました。

次に学長挨拶が行われましたが、前農学研究科長で現在副学

長の中村千春教授が福田秀樹学長の名代として挨拶を披露されました。その中で学長は、「真摯・自由・協同」を理念として国際性豊かな高等教育機関を目指す神戸大学の未来を切り開くにあたって、農学部と農学研究科が果たすべき役割について、「持続可能なグリーンで安全・安心な地球環境を構築」するためのプロジェクトに邁進してほしいと熱く語られました。

その後、ご来賓の祝辞があり、井戸敏三兵庫県知事ご名代の農政環境部長、伍々博一氏より、これまでの兵庫県と神戸大学の研究・教育・行政に関わる連携について述べられ、今後も重要視されるべき環境創造型農業について産官学の一層の協力が望まれることを強調されました。

矢田二郎神戸市長ご名代の産業振興局長、吉武準一氏からは、これまで神戸大学農学部が農学研究と人材育成を通じて、都市近郊農業の振興に果たしてきた役割を述べられ、これからも神戸の産業振興になお一層、協力していただきたいと強い期待を述べられました。

式典最後には、北浦義久六篠会会長による参加者へのお礼の挨拶が述べられ、六篠会が今後も神戸大学農学部の発展を強くバックアップしていくことを示され、特に60周年を機に今年度からは顕著な研究業績をあげた教員や学生に対して表彰する「六篠賞」制度を立ち上げることを表明されました。

式典に引き続いて、記念講演会が開催されました。学術講演は青山学院大学教授、福岡伸一氏の「生命を解くキーワード、それは“動的平衡”」、一般講演は作家、玉岡かおる氏の「みどりの民の挑戦の跡、国を支えた農の魂」と題する2講演がありました。

福岡伸一氏は、光の画家ヨハネス・フェルメールが描いたと見られる生物学者レーウエンフックの話から始まり、「生命とは、機械ではなく流れである」としたルドルフ・シェーンハイマーの画期的な生命観を分かりやすく紹介し、生命の動的平衡のとらえ方とその脆弱性の理解が重要であることをマウスでの実験や狂牛病問題など具体例をあげて詳しく説明されました。

玉岡かおる氏は、江戸末期、黒船来訪によって産業革命の波にのまれることとなった我が国の歴史においても、「農」の伝統を守り、諸外国へ農産物、林産物を輸出する人、台湾などで農業や林業の振興に尽くした先人があったことなど、様々な「農」にまつわる事例を紹介され、日本人の「もったいない」の考え方が自然の恵みを大切に、現代の省エネ、エコに繋がる思想であることを示されました。最後に、播磨いなみ野の「ため池」の歴史とその意義について説明され、スライドを使って現在の保全活動の様子を紹介いただきました。

最後に、17時30分から神戸大学生協LANS BOX 1階食堂で記念祝賀会がもたれました。グリークラブによる神戸大学歌合唱に始まり、北浦義久六篠会会長挨拶、福田秀樹神戸大学学長挨拶、鏡開き、新野幸次郎元神戸大学長の挨拶と乾杯のあと、祝宴に入りました。途中、祝電披露、丹下宗俊名誉教授、加藤征史郎元学部長および卒業生のテーブル・スピーチ、デカンショ保存会による唄と踊りなどの催しがありました。デカンショ踊りの輪の中には卒業生も混じって賑やかな一時を過ごすことが出来ました。名残惜しい祝賀会も中村直彦六篠会代表理事の閉会の辞をもって、19時30分にお開きとなりました。

以上、記念事業の一連の進行状況をご説明いたしました。事業遂行にあたって多大なご支援をいただいた卒業生、ご父兄、現・旧教職員および企業・団体の皆様にご心からお礼を申し上げますとともに、実行委員として労を惜しまれずご活躍いただいた学内および六篠会の方々に深く感謝申し上げます。

農学部創立60周年に寄せて

—学友会だより—

神戸大学学友会 会長 高崎 正弘

伝統ある神戸大学農学部の創立60周年を心よりお喜び申し上げます。農学部発祥の地である篠山といえば、個人的にも、「アカンシヨ節」がまず頭に浮かび、城下町としての佇まいと賑わいに心の安らぎを覚え、今でも季節が変わるごとに訪れますし、高校時代の親しい友人が兵庫農科大学の新設直後の医科大学進学課程に進んだことも当時の新しい進路として記憶に残っています。

母校神戸大学の農学部・農学研究科は、自然との共生理念の高まりやバイオ分野への期待の広がりといった時代の要請を背景に、国内はいうまでもなく、アジア諸国などとの国際連携教育の分野でも、一段と存在感を増しつつあります。加えて、多くの研究成果が神戸大学ビーフをはじめブランド商品として直接消費者に情報発信されるなど、神戸大学の大きな特徴の一つを形成されるに至っています。

このような環境のなかで、農学部が創立60周年を迎えられるに当たり、戦後間もない混乱期のなかから今日の繁栄に至るまでの、多くの諸先輩方のご努力に改めて敬意を表したいと思います。

ところで、大学を巡る環境に目を転じますと、少子化を背景に、大学間での優秀な学生の奪い合いが激しくなっているうえ、教育・研究の自身が、国の予算配分に反映されるようになってきています。このため、各大学は、教育・研究の充実・高度化、学際的な取組みの強化、卒業生のネットワークの活用など、より魅力ある大学創りに知恵を絞っています。

一方、神戸大学の同窓会活動においては、母校の総合大学としての成熟に伴い、学部別同窓会の連合体である学友会ベースの催しが全国各地で増えてきています。海外においても、全学共通の同窓会組織の組成が大学の国際化戦略の一環として進められています。

このように、大学や同窓会をめぐる環境が大きく変化するなかで、全学的同窓会

組織であります「学友会」は、一昨年4月の常任幹事会設置に続いて、本年4月には、事務局を大学企画部社会連携課にお引き受けいただくなど、体制の整備を進めています。

この体制整備と歩調を合わせて、活動内容の一層の充実が求められることはいうまでもなく、母校の歴史的経緯から、各学部別同窓会の連絡・親睦団体的色彩の強かった学友会を、同窓会活動の協議・決定機能的なものに一步進めるべき時期にきていると思っています。

それならばこの際、各同窓会を統合一本化してはどうかのご意見があることも承知いたしておりますが、将来はともかく、心急が形式的一本化は、固有の歴史と文化を有する各同窓会の活力を削ぎ、結果として、学友会の存立基盤そのものを不安定なものにするリスクが大きいと、現状は否定的に考えています。

今必要なことは、協議・執行機関である常任幹事会、幹事会でのより活発な議論ときちんとした方向付けのもとで、「ホームカミングデイ」をはじめとする大学イベントへの参画・支援や、基金への協力、広報体制の充実など、「神戸大学人」としての一体感を高め、スピード感をもって学友会の更なる活性化を果たすことであると信じています。

もちろん、異なる歴史を有する各同窓会を纏めていくためにはそれなりの工夫と仕掛けが必要であることはいうまでもありません。そのための基本的な考え方は、私は、欧州連合の運営理念をモデルに、「学友会は、各同窓会が単独で行うには難しいことをお引受けする一方で、卒業生と直接の接点を有しない学友会の弱点を各同窓会に補完していただく」と「出来ることから柔軟に手を付ける」ことであると思っています。

それを可能とするのは、卒業生との間に種々接点を有する各同窓会の組織力の一層の強化と、同窓会間のオープンな雰囲気醸成であります。

六篠会の北浦会長様はじめご代表の皆様には、この面でも種々ご尽力を賜っておりますが、今後とも、従来にも増して、同窓会諸活動にご理解とお力添えを下さいますようお願い申し上げます。

六篠会の皆様へ —KUCだより—

神戸大学倶楽部 (KUC)
運営委員長 伊藤 宏

まずは創立60周年おめでとう御座います。戦後間もない昭和24年に兵庫農科大学として創設され、昭和41年には神戸大学農学部となり今日まで幾多の優秀な人材を社会に送り出してこられました。

また、同窓会の六篠会は全国各地に支部を創設されOBの方々の交流を深められると共に学部並びに研究学科の支援活動を活発に行っておられ誠に同慶の至りであります。

さて、最近「食の安全」「食糧の自給率」等が取りざたされており、少子高齢化により農業が事業から事業へと変わろうとしております。

これ等の問題は農学部が中心となって推し進められなければなりません。今まではどちらかと言うと地味な学部(私見ですが)という印象がありました。これからは脚光を浴びる学部として頑張ってもらわなければなりません。

また、これらの諸問題には各学部各研究学科間にまたがって研究がなされるこ

とが多くなってきますが、総合大学の強みを発揮してこれ等の問題の解決に邁進して欲しいと思います。

同窓会も今まではどちらかと言うと各学部の同窓会がそれぞれに活動をしてきましたが、これからはそれに加え総合大学としてOBも学部を超えた繋がりをもって交流を深めると共に母校への支援が必要だと思います。

現在、その横断的な組織として「神戸大学学友会」や「神戸大学倶楽部」KUCが既に活動をいたしておりますが、今後これ等の一層の活性化を図ってゆかねばなりません。

六篠会の皆様も「学友会」は勿論のことKUCにも運営委員として能宗康夫様、石賀暢一様、中村直彦様にはご活躍を頂いており、また会長の北浦義久様には大所高所からのご指導を賜ると共に積極的に各種行事にご参加頂いており、感謝申し上げる次第であります。

今後さらに一人でも多くの六篠会の皆様もKUCにもご入会頂くことを節にお願ひ申し上げます。

末尾ながら、六篠会、農学部、農学研究学科の今後の益々のご発展を祈念申し上げます。お祝いの言葉とさせていただきます。

延喜式から延喜会へ

六篠会顧問 新家 龍 (兵C5回)

前回の六篠会報で延喜会の名称やその後の延喜会活動について書きましたが、今回はその名称の由来である平安時代の「延喜式」について触れておきたいと思えます。

梅沢・吉田編「酒と日本文明」(弘文堂)及び加藤百一著「日本の酒5000年」(技報堂出版)によりますと、酒は古く奈良時代や平安時代にも登場し、主に「朝廷の酒」として禁裏の造酒司(さけのつかさ)の指揮の下でつくられていました。その内容は「延喜式」によると年に900石程の米を使って酒をつくり、朝廷における年中儀礼などに用いられていたことになっています。

そもそも「延喜式」は律令国家の政治的大綱を規定したものであり、701年(大宝元)の「大宝律令」の施行細則、いわば平安時代初期の宮中儀式や制度を記録した事務規定なのです。その中に造酒司がつくった15種の酒のつくり方が出ています。例えば、「御酒」、「御井酒」、「禮酒」、「熟酒」などがそれぞれ詳述されています。

しかし、当時宮中では、現在のように酒を「致酔アルコール飲料」として単純に飲んでいたのではなく、祭事、節会、儀式などの中心部の饗宴として神の霊力を分け与えられることに重大な意義があったとされています。今もその伝統や儀式は残っているように思います。

時代はくだつて、武者と町民の酒、諸白酒の登場、戦国の民衆と酒、さらに元禄時代の諸白、とくに、「下り諸白」に代表される「灘酒の成立と発展」へとつながり、技術革新をへて現代の酒造業に伝えられています。今も「くだらないもの」とは「つまらないもの」を意味しますが、当時「江戸へくだらない酒」、つまり「良くない酒」から由来したものと云われています。

このように、「灘酒」として全国にその歴史と名声を博している「灘五郷」の企業や関係部署を中心に活躍している神戸大学の卒業生が組織する延喜会は、その伝統と誇りを「よりどころ」に日夜努力を続けている六篠会支部の一つです。また、神戸大学の教員、事務員・学生からなる「日本酒研究会」についても農学部の微生物機能化学研究室が中心に企画・開催しております。今後益々の発展を期待して止みません。

KŌBE六篠会からの報告

山本 佳世

KŌBE六篠会は、兵庫農科大学、兵庫県立農業短期大学及び神戸大学農学部を卒業し、神戸市に勤務する者を会員として、昭和59年に結成されました。現在会は、会員128名(現職会員73名、OB会員49名、名誉会員6名)を数えています。



会員の採用区分は教職、農業、化学、衛生監視(農芸化学、畜産)から一般行政まで幅広く、また勤務先も小・中学校(教員)、環境局(廃棄物や環境保全に関わる仕事)、保健所や区役所(食品衛生・環境衛生・動物衛生に関わる仕事)、産業振興局(農・水産・畜産業の農政振興に関わる仕事)、建設局(道路、下水道、公園などの土木関係の仕事)、水道局(水質検査などの仕事)のほか、フルーツフラワーパークや六甲山牧場、海釣り公園・・・など多岐にわたっており、安全で安心なまち「こうべ」の実現に向けて、それぞれの職・立場で会員一丸となって取り組んでいます。

私は平成20年に農業職で採用され、現在まで農業振興センターに勤務しています。農業振興センターでは主に農産・畜産の生産振興事業と地域振興事業を実施しており、私は生産振興事業のなかでも農業共済という事業を担当しています。農業共済は水稲やビニールハウスが台風等の自然災害によって被害を受けた場合にその被害額の一部を補償するという、いわゆる農業に対する保険事業です。いざというときに農家の方を支援することで農業生産・農業経営の安定化をはかっています。

最近の農政のキーワードは地産地消です。神戸市では様々な特徴のある農作物が生産され、直売所などで販売されています。皆様も見掛けられま

したらお試しいただけたらと思います。

なお、本会の活動は、年1回の総会・懇親会の開催と名簿の発行が中心となっています。総会・懇親会では、農学部長や六篠会会長等のご出席をいただき、大学の近況を伺ったり、思い出話に花を咲かせたり、会員間の情報交換を進めたりと親睦を深める良い機会となっています。

今後とも、「同窓生意識」をより一層高めていく努力を続けていきたいと考えています。

役職名	氏名	卒業・回生	所属(勤務先)
会長	橋本 宏之	51年・神Z7回	保健福祉局 東部衛生監視事務所
副会長	牛若 純一	48年・神C4回	保健福祉局 食品衛生検査所
〃	渋谷 一郎	52年・神C8回	保健福祉局 環境保健研究所
〃	鈴木 壽也	59年・神P15回	産業振興局 中央卸売市場本場
幹事	森川 功一	55年・神C11回	市民参画推進局 生活情報センター
〃	八木 正博	56年・神C12回	保健福祉局 環境保健研究所
〃	長澤 秀起	57年・神A13回	産業振興局 農水産課
〃	藤井 俊宏	58年・神C14回	保健福祉局 西部衛生監視事務所
〃	安原 潤	59年・神A15回	産業振興局 中央卸売市場東部市場
〃	向井 茂樹	2年・神A21回	産業振興局 農水産課
〃	景山 敏一	2年・神T21回	みなと総局 臨海整備事務所
〃	長浜 慶治	2年・神T21回	神戸市都市整備公社 都市整備課
〃	岡野 光世	3年・神A22回	産業振興局 農業振興センター
〃	為国 司	5年・神C23回	環境局 事業系廃棄物対策室
〃	角村 朝葉	9年・神A28回	農業委員会 事務局
監事	高谷 信之	52年・神A8回	産業振興局 農業振興センター
〃	平井 朗	52年・神C8回	保健福祉局 東部衛生監視事務所
〃	松宮 道生	60年・神A16回	神戸市公園緑化協会 公園緑地課

兵庫県六篠会 ～農学部創立60周年に寄せて～

会長 三浦 恒夫

神戸大学農学部創立60周年、おめでとうございます。

10月31日には、多くの先輩諸氏、大学教職員の皆様、現役の学生諸君が一堂に集い、盛大に記念行事が執り行われ、ともにお祝いできましたこと、何よりの喜びです。ご尽力いただきました関係者の皆様に衷心より感謝申し上げます。

県六篠会は、昭和35年頃の親しき同窓の仲間の集まりを起源に、昭和56年9月26日に正式に発足し、今では兵庫県立農科大学開学時の1回生である田中平義先輩を筆頭に、つい最近卒業したばかりの者まで総勢214人(うち現役の県職員134人)を擁する大組織になっており、まさに農学部60年の歴史が染み込んでいます。

また、県と農学部との関連では、平成18年度から連携講義「兵庫県農林水産行政論」を実施しており、4回目となる今年は県六篠会から3名が講師を務めています。行政マンとして、先輩として現役の学生諸君に講義でできることは本当に幸せなことです。

さて、本年度は、10月10日(土)にグリーンヒルホテル明石にて、総会並びに懇親会を開催いたしました。ご来賓として、神戸大学副学長の中村千春先生、神戸大学農学部長の内田一徳先生、六篠会本部の北浦義久会長においでいただき、大学並びに農学部内外の様々な情報を頂戴いたしました。あいにく他の行事とも重なり、参加者は少なかつたものの、密度の濃い充実した時間であったと思っています。

話は変わりますが、私、昨年の総会で県六篠会の会長を拝命いたしましたが、この1年間をいざ知らず過ぎてしまったことを深く反省をしています。

そんな中で、何人かの方々とお話したところ、我々は同窓としての絆が他の大学に比べて弱いのではないかと、というご意見というか感想をいただき、なるほどそうだなと思いました。じゃあ、どうすればいいかということなんです

が、同窓の絆というのは、つまるところ「先輩が後輩を可愛がる、育てる」ということにつ着くのではないのでしょうか。

それで、先日ある人から、金八先生の言葉を紹介いただきました。

それは、人を育てるには愛情の3ふりかけが必要だ、というのです。その3ふりかけとは、①目をかける、そして、②気にかける、さらに③声をかける、だそうです。この金八先生の愛情3ふりかけを私たちが常備することで絆を強くしていけないかなあ、と青いことを思っている今日この頃です。

今後とも役員の皆様とご相談の上、県六篠会のよりよき運営に努めることとお約束いたしました。支部からのご報告とさせていただきます。



- 会長：三浦 恒夫 (神9A)
- 副会長：時枝 茂行 (神4A) 新岡 史朗 (神11P)
- 福田 稔 (神11T)
- 監事：奥田 邦清 (神5A) 小林 保 (神7A)
- 宮島 康彦 (神23P)
- 幹事：相野 公孝 (神12P) 青田 和彦 (神22T)
- 岩見 昌典 (神14A) 前田 和人 (神22A)
- 片山 喜久男 (神14P) 大塩 哲視 (神23C)
- 松山 稔 (神14P) 岡井 美和 (神24A)
- 松田 吉弘 (神16T) 藤田 茂之 (神24P)
- 椿原 健 (神18A) 川端 忠則 (神26A)
- 牛尾 昭浩 (神19A) 柏原 久美子 (神34PR)
- 横山 明人 (神19T) 鈴木 大智 (神16卒PR)

関東支部の活動状況

支部長 岸谷 靖雄 (兵A10回)

六籐会関東支部における年間行事の大きなものとしては、支部総会と木曜会があります。今年の支部総会は10月16日(金)18時30分より、本部から北浦会長ご出席のもと開催し、北浦会長からご挨拶を頂きました。10月31日に開催されます農学部60周年記念行事に関するお話や、他支部の活動状況などのお話がありました。会計報告後の講演は、昭和44年に植物防疫学科を卒業されました山田 保様をお願いを致しました。山田様は学校を卒業後40年間JICAに勤務、今年9月に退任されるまで各国で活躍されました。現在は横浜国立大学特別契約教授としてお仕事をされておられます。演題は「体験的国際協力から21世紀を見つめて」で、特に海外での活動を中心に、日本の果たしてきた役割、そしてこれから日本が果たしていかなければならない役割など、短い時間の中で非常にエネルギーにお話しをされました。参加者全員熱心に講演を拝聴いたしました。その後懇親会に移り、和気藟々の内に時間が経過し、21時過ぎ再会を約しながら散会いたしました。今年も数名が初めての参加でした。出席を予定しておられた現役の方数名が、仕事の関係で出席できず、今年の参加者は総勢で23名でした。

木曜会は神戸大学全学部のOB会が持ち回りで第4木曜日に東京KUCで講演会を開催いたします。内容は特に制限がありませんが、六籐会以外のOBも聞きにこられるため、出来るだけ皆が興味を持てる内容の演題を選択いたします。演者は原則的には神戸大学卒業生が望ましいということですが、必ずしもこだわらないようです。

六籐会は3月26日(木)が担当でした。演者は昭和35年に農芸化学科を卒業さ

れ、日本精糖(株)で38年間を過ごし、世界各地で活躍されました古西 義正様をお願いを致しました。演題は「砂糖のお話し&世界各地の製糖関連業務でのエピソード」でした。甘味の歴史や分類、砂糖の種類や製造など多岐にわたるお話しは、参加者一同興味深く拝聴いたしました。他学部OBの方々も出席され、熱心に質問をしておられました。非常に厳しい世の中ですが、ちよびり甘いお話で気分も和らいだのでは？

現在東京凌霜クラブでは、校友会東京支部役員会を開催、当クラブの今後のあり方について、意見交換を行っています。今まで三学部が主体で運営されてきましたが、もっと他の学部も当クラブ運営に参加できないか、ということです。六籐会としては総会及びそれに伴う役員会を当クラブで開催しておりますが、それ以外には殆ど関わっていないのが現状です。これからも検討が続けられます。

現在六籐会関東支部会員は800～900名を数えると思われます。ただ現役の方々方は移動が激しく、総会の案内を出しても、宛先不明で戻ってくる葉書が10%以上あるのが現実です。また現役の方々に出来るだけ総会、木曜会参加を呼びかけておりますが、忙しいこともあって参加者が少ないのが現状です。できるだけ多くの方々に参加して頂くことが今後の課題だと思っております。

なお六籐会関東支部役員は全員留任ということで進めてまいります。役員は以下の通りです。

和泉孔庸(S35年卒)	長岡俊明(S37年卒)	山本隆司(S37年卒)
岸谷靖雄(S37年卒)	本田 勉(S39年卒)	多田泊二(S40年卒)
早瀬 基(S46年卒)	上山維介(S47年卒)	田中 易(S56年卒)
東野純明(S57年卒)		

今後とも六籐会関東支部を宜しく願ひ申し上げます。

東海支部活動報告

支部長 長谷川 信弘 (兵C16回)

東海支部は、平成21年10月25日に支部総会を開催しました。六籐会本部より、北浦会長が出席され、東海地方に在籍されている20名程が参加し、1年振りの旧友を温めました。

総会の後の講演会では、H8年神戸大学大学院・熱帯植物卒で、現在、名城大学農学部准教授の平野達也先生の「タイの洪水地帯における浮稲栽培を中心とした農業」の講演がありました。その中で、タイ国における米作りや米生産地域での食生活の話聞く事が出来ました。東海地方では、一昨年から昨年にかけて、農薬汚染による食の安全や、食品の偽装問題がありました。昨年は、アメリカを震源地とする金融恐慌が勃発し、日本の中でも、東海地方は、トヨタを初めとする元気のある製造業が多いと言われていましたが、金融恐慌の嵐は、東海地方にも及びました。今後の回復が望まれます。しかし、世界に目を向けると、世界人口増加により、食糧問題・エネルギー問題が問われています。

その中で、生物多様性の国際目標が注目されています。来年10月には、名古屋でCOP10が開催されます。それに向けて、10月4日付・朝日新聞には、朝日地球環

境フォーラム2009「あすの農学を考える座談会」の中で、「農学が生態系を守る先頭に」とアピールされています。

確かに、石油・石炭を利用する関連の学会は、工学部が主体です。しかし、バイオマスエネルギーは農学系です。食糧を含め、農業・林業・水産業をこれから、どの様に発展させるのか？ それは、農学を学んだ我々に課せられた宿題だと思えます。

家族や地域、あるいは、話が出来た人には、これからの地球を守る為に、農学を学んだ私たちが、何が出来るかを語りかける必要があると思っています。

尚、東海支部には、200名以上の卒業生が在住されています。支部総会には、もっとたくさんの会員が参加されます様、皆様方の

ご協力をお願い致します。六籐会の会員の皆様も、これからの地球・日本、更に六籐会東海支部を押し上げて頂く様願ひします。



広島県支部近況

支部長 番匠 宏行 (兵Z13回)



六籐会広島県支部を昨年設立したことは、前回の会報で報告しました。今回はその後の近況を報告します。昨年の夏以後、経済及び政治情勢が慌しくなり、支部の総会も少し後ろにずれ込んでしまいましたが、今年の11月14日目に第2回目の総会を実施しました。

当日は通常の議事に加えて、役員坂本宏司さん(広島県立食品工業技術センター)に「食のバリアフリー化を目指して」と題して記念講演をお願いしました。高齢になると硬い食べ物が噛み砕きにくくなる人が増加するが、食材の形状を保ったまま任意の軟らかさに調節可能な「凍

結滅圧酵素含浸法」が開発されました。介護食品等への利用に留まらず、機能性食品や造影剤を含ませた検査用食品への応用が図られています。国内では特許を既に取得済みですが、米国、欧州、中国などへも国際特許を出願中ということでした。硬い食材のスルメ、レンコン、ゴボウ等を試食しましたが、本当に柔らかかったです。その後懇親会で、次回での再会を約しました。

役員紹介：副支部長：宮(神T12)、副支部長：五味(神P17)

事務局：外林(兵Z15)、会計監査：坂本(神C11)

幹事：細田(兵A14)、金野(兵Z15)、土屋(兵A17)、松本(神A14)、慶徳(修14)



兵庫県立農業大学 校長

武 正興

(神P3回)



食と農を考える—つくる・たべる・そだてる人の輪—

私は、昭和47年卒の神戸大学農学部3回生です。兵庫農科大学でいえば、20回生です。卒業と同時に兵庫県に就職し、早38年目を向かえ来春退職するところまで漕ぎ着けました。多くの同窓生に支えていただいたお蔭で今日を迎えることが出来たと思います。

就職した年に、舞子ビラで開催された県六篠会総会(兵庫農科大学及び神戸大学農学部を卒業した兵庫県職員同窓会)において兵庫農科大学1回生の田中平義さん始め先輩方に歓迎していただいたことがついこの間のように思われます。

県六篠会は、最も多い時で現職250名の会員数を誇り、現在も150名が活躍しています。そのほとんどが農政、普及、試験研究で仕事をしており、私も就職4年目から34年間農林行政に携わってまいりました。現在は、兵庫県立農業大学校で農業後継者の育成に携わっております。

就職した昭和47年は、昭和42年に米の生産量が需要量を始めて上回り、初めて100%自給できるようになってからたった5年後ですが、昭和44年から、米の在庫の増加による食糧管理会計の赤字が問題視され米の生産調整が始まっています。

結局、県農林行政に携わってからずっと米の生産調整の下で仕事をしてきたことになります。米の増産という至上命題に向けた政策から一転して、多様な産地作りと産地間競争の時代、そして今は国際化の時代です。農業にとっては、ずっと厳しい情勢が続いています。

今、外食・中食・加工食品の消費増による輸入農産物の増加及び量販店の価格競争の激化と消費者の低価格志向による農産物価格の低迷、農産物生産資材の高騰等により日本の農業は弱っています。

しかし、まだ消費者の中には、お茶碗1杯10円のお米が高いといわれる方がおられます。

そこで、平成4年に当時神戸大学農学部高山敏弘教授、保田茂助教授とJA兵庫中央会、県農林水産部・健康福祉部・教育委員会の有志により、「ひょうごの食研究会」を設立し、ライフワークとして18年間活動しています。

研究会の目的は、「つくる・たべる・そだてる」をキーワードに、食に関心のある生産から消費に至る様々の分野の方が一堂に会し、生産・消費・教育・健康・文化について、共に研究し、意見を出し合い、食に関して広い視野での情報を交換し、そ

れぞれの活動の場で、それぞれが活用することを目的とした緩やかなつながりを目的としています。

この会の活動の詳細は、ホームページ「ひょうごの食研究会」をご覧ください。

18年間の研究会の活動から私たちが今「農と食」についてどうすればよいのかを考えて見ますと

1. 生産者ももっと消費者に対して「農」を話しかけること。
2. 消費者は、「食」についてもっと考えること。
3. 生産者と消費者をつなぐ農と食の指導者は、農と食を関係付けた活動をすること。

その視点は、

1. 世界の食料はやがて不足する。
2. 食料の大量生産、大量輸送による供給は、農薬の使用を禁じえず、環境にも負荷が大きい。特に海外からの遠距離輸送は、安全性からも環境負荷からもいつまでも持続可能とは限らない。
3. 日本人の由来から紐解き、日本人の体に適した食生活を営むことが大切である。
4. 家計消費支出に占める食料費は決して高くはない。何に支出するかを考える。
5. 基本的には、自ら食料を確保し、調理すること。つまりもっと「食」に対して時間を割くことが、次代の子どもたちに親に対する愛情を育み、生きる力を育むことになる。

これらのことを総合して、地産地消を進めることが大切だと思います。

地産地消は、生産者にとっても消費者にとってもたくさんのメリットがあります。

しかし、地産地消を成立させるには、生産者と消費者の相互理解が不可欠です。

私は、農家出身ではありませんが、神戸大学農学部で勉強させていただいたお蔭で、兵庫県農林行政で一生の仕事させていただくことが出来ました。

これからも日本の農業の応援者として暮らして生きたいと思っている次第です。

ヤシマ産業株式会社

取締役 技術本部長 田中 易
(神P12回)

大学院修士課程を修了後、武田薬品工業株式会社に入社し、京都市左京区にあった農薬研究所に配属となり、除草剤スクリーニング担当として当時武田薬品になかった自社創製除草剤の芽を探すことになった。就職後、大学での研究を松中昭一先生のご指導を仰ぎながら学会誌に投稿できたことは、新たな除草剤研究を始める良いスタートになった。当時の萩本研究所長の方針で、水稲用除草剤に特化したスクリーニング体制となり、運良く入社4年目で新規除草剤の芽が選抜された。これに伴い、新除草剤の国内開発に向けて開発部に異動し、北海道から沖縄までの農業試験場を2年間ではあったが、駆けずり回ることになった。気象、土壌条件の違いにより温室試験と現場圃場試験結果とのギャップを痛感し、如何に通じ一編の研究では不十分で、現場での現象を重要視しなければならないか身に染みた。新たな意識で研究所に復帰することになった上、念願であった研究所統合により、茨城県つくば市でまた新たな研究活動を開始することになった。

つくば統合時の研究は殺虫剤スクリーニングに主体が移っていたこともあり、新規除草剤の芽は出てこなかったが、1993年自社創製除草剤第1号(イマズスルフロン)がつくば統合前年に登録、上市されたことから、この薬剤を母剤にした混合剤の開発研究に主体が移っていった。この系統の除草剤は日本では3番目の登録であり、競合する他社剤と差別化するための研究に日夜明け暮れた。本剤は水田への投下薬量が従来剤の1/10近くである上、植物特有の酵素を阻害するため動物に対する安全性が非常に高いことが特徴であり、(財)植物調節剤研究協会のアイデア、方針等もあり、今までの水田への薬剤投下回数が半減以上になった上、水田畦畔から処理できる製剤が普及するようになった。新しい薬剤の開発が新しい技術を生み出し、除草に費やす労力と時間が大幅に節減されることとなった。反面予想されていたことではあるが、当初アメリカの水田では同系統薬剤を単剤で使用された場合にはその抵抗性種の発現が報告されていた。日本では混合剤であるために抵抗性種が発現しにくいと考えられていたが、1994年に日本でもこの系統化合物の抵抗性種が報告され、この後次々に抵抗性草種が増加していった。この対応策として、抵抗性草種に有効な薬剤をさらに1～2剤添加することになり、一時投下薬量や混合薬剤数などが低減されたにも関わらず、またそれに逆行することになり、雑草を完全に防除することの困難さを思い知らされた。当然ながら、抵抗性草種の出現により、主なる研究は抵抗性草種対策混合剤を開発することとなった。ところが、筋書きのないドラマというものもあるもので、抵抗性草種研究を続けていく中で、過去に候補であった同系統化合物が抵抗性草種に効果がある

ことを発見した。一般的には抵抗性種は同じ作用機構を有する同系統化合物に交差抵抗性を示す。早速、東谷研究所長直轄のプロジェクトが設置され、そのリーダーとして種々の仮説をもとにスクリーニングを開始した。6名の小さいプロジェクトではあったが、2年後の2002年に目標をクリアした化合物を国内委託試験に供した。また同時期に大川秀郎先生のご指導の下、1剤目の除草剤イマズスルフロンについて研究成果を取りまとめ、2002年9月に神戸大学より学位を授与された。

一方で、グローバルな農業企業の統合が推し進められていたが、国内農業業界内での統合の動きも活発化し、武田薬品も農業事業を住友化学に売却することになり、2002年11月に両社のジョイントベンチャー会社として住化武田農業株式会社が発立された。5年間のジョイントベンチャー期間中の2004年10月には、研究所(つくば)の住友化学研究所(宝塚)への移転、開発部への転勤と、つくばに研究所が統合された当時には考えられなかった変化が劇的に起こった。異文化の会社を統合することは非常に苦しみがつきものであるが、お互いに良い方向に進めるという意味が確認できれば、予想以上にシナジー効果が得られるものである。幾多の組織改編後、2007年11月に“新生”住友化学が誕生した。この間にも2剤目の新規剤開発は予定通り進捗し、2008年夏に農水省に登録申請された。本剤の開発により、単剤で水田雑草防除の可能性が広がり、今後の水田雑草防除に多大なる貢献ができたように思う。

2009年7月に現職場であるヤシマ産業株式会社へ異動した。ヤシマ産業は森林分野の農薬と動物用医薬品を開発、販売する会社で、マツ枯防除分野ではNo.1の会社である。昨今、農薬に対する認識が十分になされず、農薬が環境問題の原因として槍玉に挙げられることが多いが、快適で潤いのある生活を送るためには、農薬による防除もその選択肢の一つであることを農業会社の一人として十分な説明を継続していかなければならないと考える。

研究、開発においても、自分一人で成し得ない事が人と関わりを持ち、協力し合うことにより、活動が活性化され、良い結果が得られると身をもって感じてきた。森林を含め、快適な住環境を子孫に存続させていくためにも、種々の人々と協力、理解し合い、企業人としての責任と使命を果たしていきたいと思う。

神戸大学大学院農学研究科教授

附属食資源教育研究センター長 伊藤 一幸
(神4回)

正直なところ、大学で何一つ勉強しなかった私がこの紙面を汚すにはいけないと思いつつ、キーを叩いております。私は1969年に一浪して本学農学部園芸農学科に入学しました。入ったときは大学紛争の真っただ中で、長野県の山奥から出てきた田舎者はそうした運動にすぐ染まりました。半年間の自宅待機の後、授業が始まったのが10月からですが、それもほとんど「クラ討」ばかりだった気がします。いわゆる一般教養や専門科目の勉強はほとんどしませんでした。新書や小説をよく読み、同級生と下宿や大学で語り合いました。志賀高原のスキーで足を折っている間に卒業式があり、気がついたら1973年に卒業しておりました。仕方なし、当時の教育学部の中西哲先生のところで植生調査のアルバイトをしながら、公務員試験の勉強をし、何とか合格しました。そのとき、農薬学の鈴木直治先生が「伊藤君、君はこれから農水省の研究機関に行くよだけれど、このまま行っても使い物にならないから、東南アジアにでも出かけて見ないか」と誘われ、ルソン島とジャワ島に併せて3ヶ月間、一人旅をしてきました。当時は航空券が高く、みんなにカンパしてもらったことを今でも覚えています。この旅がその後の人生を変える転機になりました。

農水省の研究機関では一貫して雑草防除の研究をしました。武豊、鴻巣、つくば、半島マレーシア、大曲、つくば、盛岡と場所は転々としたが、雑草と関わり続けてきました。オモダカ、クログワイ、タイヌビエ、ハルジオン、アゼトウガラシ、アメリカアゼナ、イヌホタルイなどが対象雑草だったでしょうか。主として雑草の生態と除草剤抵抗性生物型について研究をしてきました。オモダカ塊茎の生態研究は私の学位論文です。そんなわけで、この9月には『クローズアップ現代』の「スーパー雑草大発生」に生出演させられる羽目になりました。

こうした研究をしている間に海外調査や国際会議に何度も行かせていただきましたので、今日の熱帯有用植物学の基礎ができました。現在はもっぱら「熱帯植物学」や「雑草学」の講義をしながら、幾つになっても勉強を続けることが大切だということをもっとして、アフリカの強害根寄生雑草ストリガ類の防除の研究をしています。神戸大学に来るまではサハラ砂漠以南

のアフリカは農業の研究対象として、とても行けるようなところではないと思っていました。でも、実態を知たらどうしても

研究しなければならない場所だと思えました。今まで育てていただいた方々への恩返しの意味でも、寄生雑草を押さえ込む持続的な方法を見つけねばならないと、今は思っています。

私は現在、加西市にある食資源教育・研究センター(旧附属農場)長、地域連携センター副センター長などの大役も仰せつかっております。昨年からはじめました「教育GP」というプログラムでは、篠山市や豊岡市の農業現場に学生とともに出向いて、農家の皆様方にお教をを請うような農業や農村の勉強に行っております。また、今の学生は国際感覚を身に付けねばなりません。ベトナムやフィリピン、時にはマラウイやケニアの農村に連れ出して勉強させています。こうした活動を通して、卒業生の皆様方にも何かとご迷惑をおかけすることがあるかと思ひます。今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。



昨年(2019年)の会報No.23の表紙写真

「この木なんの木?」
神戸大学農学部のシンボルのような大きな木。「ソテツの前で会いましょう」という言葉をよく耳にしますが、実は大きな木はナツメヤシの仲間、観賞用のカナリヤシ(Phoenix canariensis)や、仲間の属名がPhoenixなので一般にはフェニックスとも呼ばれています。奥の時計の右側に見える小さな植物がソテツ(Cycas revoluta)です。それではみなさん、次は新しい合言葉でお会いしましょう。「カナリヤシ(フェニックス)の前で」

伊藤 一幸

第4回神戸大学ホームカミングデイの開催

担当理事 山本 博昭 (兵A12回)

4回目を迎える神戸大学ホームカミングデイが2009年10月31日に秋晴れの各キャンパスで開催されました。今回のホームカミングデイは、午後から我が農学部では創立60周年記念行事が遂行されましたが、その詳細は前記別項で記載されますので、ここでは午前中に行われた神戸大学全体企画についてのみ報告します。

今回の全学記念式典は、神戸大学創設記念事業に位置づけられて再生・修復された六甲台講堂(出光佐三記念六甲台講堂と正式名称に変更)のお披露目を兼ね、同講堂は500余りある席が卒業生(特定年度としてS29、S39、S49、H20年度等の卒業生に案内状を送付)を中心とする出席者(来賓、現・旧教官を含む)で満杯になりました。

記念式典は、NHKアナウンサー住田功一さん(1983年経営学部卒)の司会で午前10時半に始まりました。福田秀樹学長は冒頭の挨拶で、講堂の再生・修復にあたり企業や団体、多くの卒業生から多大な支援を頂いたことに深く感謝し、その上で「これを機に、国際的に新たな飛躍を図りたく全力で取り組んでまいります」と決意を述べました。続いて各同窓会の全学組織である学友会会長高崎正弘氏が挨拶し、



大学と同窓会が協力態勢をいっそう強めるよう呼びかけました。

次に、ヒューチャーアーキテクト(株)の代表取締役CEO、金丸恭文氏(1978年工学部卒)による「神戸から始まった挑戦」と題する講演があり、在学中に友人と共に渡米、35歳にして会社を設立、マイクロソフト社ビル・ゲイツとの出会い等、自らの人生におけるターニングポイントを淡々と語り、「神戸と神戸大学の潜在能力を信じて欲しい」と言う言葉で締め括り感銘を受けました。さらに、神戸大学軽音楽部のメンバー3名によるジャズ演奏3曲(「朝<ペール・ギュント組曲より>」、「The Girl from Ipanema」、「Autumn Leaves」)が披露され、最後に、田中康秀理事による閉会の挨拶で幕を閉じました。

このあと、六甲台本館前の大テントでアナウンサー朝山くみさん(1999年経済学部卒)の進行でティーパーティーが開かれ、多数の参加者で賑わい懇親を深めました。

今回のホームカミングデイは、応援団やサークルなど多くの学生が協力し、キャンパスツアーの案内人を務めたり露天を出したりして盛り上げ、卒業生のみならず現役学生も一体となって参加しているとの印象を強く持ちました。

六篠会代議員総会報告

同窓生の交流・大学の発展を目指して

代表理事 中村 直彦 (神1回)

現在、日本国中に猛威をふるっている新型インフルエンザ。当初、水際作戦をしている最中に、第一号の患者が神戸市内で発生したとの情報が5月16日(土)の昼ごろに入った。

その当日は丁度、農学部C101教室で六篠会総会を開催すべく予定していたところであったが、大学の学舎全体が閉鎖され、会議を開くことが禁止されることになったため、総会そのものができなくなり中止いたしました。

総会に出席の予定で足を運んでいただいた同窓生の皆さんには、しばらく休憩していただいたあと、お引き取りいただいた次第で、誠に申し訳なくしております。

また、当日は、本年度が農業部創立60周年となることから、イベントの意味から、「農学部のあゆみ」と題して、山本博昭名

- ①第1号議案 平成20年度六篠会事業報告並びに収支決算について
- ②第2号議案 平成21年度六篠会事業計画(案)並びに収支予算(案)について
- ③第3号議案 六篠会役員(理事、監事、顧問)、代議員の選任について
- ④その他 ・神戸大学農学部創立60周年記念事業について

はじめに、北浦会長(兵・A・6回)から、神戸大学基金への協力依頼、農学部創立60周年記念事業に対する協力依頼のほか、平素から六篠会への協力に対するお礼を述べた。

その後、議長の選出を行い、坂井永利氏(兵・A・12回)に議長をお願いしました。

平成20年度事業実績

まず、第1号議案の平成20年度事業実績については、①六篠会代議員総会・理事会等の開催、②農学部の施設管理への支援、③学術講演会(9学会)の開催に対する援助、④入学者(修士学生を含む221名)への記念品の贈呈、⑤六甲祭、六甲山マラソン大会など学生活動に対する援助、⑥卒業生(卒業生198名・修了生133名)の卒業記念パーティ等に対する援助、⑦会報の発行、⑧同窓会の支部活動に対する援助(関東支部・東海支部・KOBES市役所支部・広島支部)、⑨退職教員に対する記念品の贈呈、⑩学友会など他学部の同窓会との交流、⑪慶弔関連などの活動を実施しました。

また、収支決算については、前記事業実績のとおり、会報の発行、各種会議の開催、農学部や各種活動への支援といった例年ごとの予算執行のほか、農学部創立60周年記念事業に対する準備に要する経費として支出しました。また収入の部は、175名の入会を予定していた新規会員が178名であったことや名簿の販売等により、ほぼ例年ごとの収入を確保できたこと、さらに従来から引き続いて運営経費の削減を図ったことにより、予算枠内で執行することができ、次年度に相当額を繰り越すことができました。

監査報告については、監事である辻壮一氏(兵・Z・12回)と外山眞理さん(神・C・8回)の2名を代表して、外山さんから「適正に執行されている。」旨の報告がなされました。

平成21年度事業計画

次いで、第2号議案の平成21年度事業計画(案)並びに収支予算(案)については、経済が低迷する中において、経常的事業は、例年と大差のない内容とする一方、以前に実施していたが、現在休止している「海外渡航援助」を大学のニーズに基づき復活し、また、本年度は農学部創立60周年記念事業を実施するための負担経費を計上し、一部を六篠会基金に造成するほか、「六篠賞」の創設を予定して予備費を組むことにしました。

※「六篠賞」は、神戸大学農学部の声価高揚と研究を応援するため、優秀な教員・院生・学生の栄誉をたたえ表彰する制度

六篠会役員・代議員の選任

そして、第3号議案の六篠会役員(理事、監事、顧問)及び代議員の選任については、「役員(任期は2年、代議員の任期は4年とす

誉教授(兵・A・12回)の記念講演を予定していましたが、これも中止せざるを得ませんでした。準備にご苦勞をおかけした講師の山本先生、そして聴講を楽しみにしていた皆様には大変ご迷惑をおかけいたしました。

そのため、本来は4年に1度の総会の開催年ではありましたが、このような事態から急遽、「代議員総会」に切り替えて、7月11日(土)、午後4時30分から神戸・元町のKUC事務局のある本館牡丹園において、六篠会の事業活動及び決算・予算などについて審議し、承認を得ました。

その内容は以下のとおりです。



代議員総会の様子

る。」となっており、本年度は、役員、代議員ともに改選の年になっています。会議では「事務局案があれば提示してもらえないか?」といった意見が出たため、事務局より原案の説明を行いました。

その内容は、現役の方を中心に、一部の方が交代されることになりました。その他六篠会の各支部から役員(神戸市役所支部長、兵庫県庁支部長)又は、代議員(関東支部長、東海支部長、広島支部長)に入っていただき、六篠会の組織・運営の強化を図ることにしました。また、大学選出の副会長職に伊藤幸氏(神・A・4回)神戸市役所選出の副会長職に橋本宏之氏(神・Z・7回)、兵庫県庁選出の副会長職に三浦恒夫氏(神・A・9回)を選任しました。

連絡事項

その他の事項では、大学と同窓生との交流の場である第4回目の「ホームカミングデイ」が、今年は、10月の最終土曜日である31日の午前に計画されており、午後からは『神戸大学農学部創立60周年記念事業』を開催することになっていることから、一緒に参加いただくよう案内いたしました。

以上、事務局からの説明を行い、すべて原案どおり可決・承認されました。

なお、平成20年度の収支決算、平成21年度収支予算、現六篠会役員(理事、監事、顧問)、代議員名簿は後記。

代議員総会ののち、懇親の場に移り、西川欣一氏(兵・A・1回)より、ご挨拶をいただき、安尾勲氏(兵・C・5回)の乾杯で宴が始まり、田中平義氏(兵・C・1回)の中締めでお開きとなりました。

その間、大学60年間の歴史から新型インフルエンザに至るまでいろいろな話題で華が開きました。ご出席いただいた皆さんご苦勞様でした。



懇親会で交流と連携

「六篠賞」を創設!

《未来を切り拓く 大学・同窓生に期待》

代表理事 中村 直彦 (神1回)

過日、神戸大学農学部が創立60周年を迎え盛大に記念行事を開催することができた。福田神戸大学長、中村副学長ほか全副学長、新野元学長をはじめ兵庫県庁、神戸市役所等の団体からの来賓を迎えて、内田農学研究科長ら農学部の現役の先生方と我々が学んだ旧教官、そして多くの同窓生が六甲台に集まった。

これだけ多くの参加者が結集したことに、農学部の魅力と同窓生のパワーを改めて感じているところである。多くの参加者、募金の提供をいただいた「同窓生の思い」、それに勇気づけられるかのように、行事のプランニングから実施に至るまでの「創立60周年記念事業会」の緻密な取り組みなど誇りに思っている。

また、創立60周年を記念して、六篠会が、優秀な学生や教員を対象に表彰制度「六篠賞」を新たに創設した。

昨年、ノーベル賞を日本人の化学者が独占したことが大きく報道された。あわせて、かねてから大学運営が厳しさを増していることから、大学の知名度の向上といった議論もされていたところである。今までも多くの優秀な人材を排出してはいるものの、さらに神戸大学のレベルアップが望まれているところである。

そこで、いままでとは違った形で、即ち、建設的かつ未来志向の形で農学部を支援することを考えた。具体的には①神戸大学農学部の教員、学生の士気高揚と研究の応援、②神戸大学農学部の声価高揚、③農学の進歩と社会への貢献といった大義のもとに、毎年、優

秀な教員・院生・学生の功績・栄誉をたたえ表彰する制度を設けることにした。表彰状を授与するほか、副賞の最高額を100～500万円とするなどを予定しており、大いに研究、勉学に励んでいただきたいものである。

今後、制度、審査方法などの詳細を大学と詰めて、今年度3月には最初の授与式を実施する予定である。

一方、輸入農産物の安全性の問題や、産地偽装の問題から、近年、農産物の安全・安心に対する関心が高まっている。その他、地球環境の温暖化や異変、世界人口の増大に伴う食糧問題がクローズアップされるなど、農業・農学に対する見方が変わりつつある。

CO₂の削減等環境問題、食糧問題、健康といった課題のどれをとっても農業・農学と大いに関係が深い。農業・農学は、将来が期待される産業であり、学問であり、これからの時代、社会を担っていくものと考えられる。

あわせて、脆弱化した農業者、農村社会を立て直していくことも必要である。農村の高齢化が極度に進み、耕作地の荒廃化が進行し、農産物の自給率の低下などを見れば緊急を要する課題である。

このような多面的な課題を克服するために、農学部、農学の在り方をさらに深化・発展させなければならないと思う。

21世紀は、農業・農学の時代である。

夢を実現し、新しい時代を切り拓く、大学に、そして同窓生の活躍に期待している。

生命機能科学科
応用生命化学コース

環境分子物理化学教育研究分野

教授 **大野 隆**
 助教 **木村 行宏**

六篠会の皆様、こんにちは。今回は、私たち環境分子物理化学(旧称:生物機能物理化学)研究室についてご紹介します。当研究室は、1994年10月に神戸大学医療技術短期大学部一般教育等から幡山教授(当時、現神戸大学名誉教授)、大野助教授(当時)が農学部生物機能化学科(当時)に移籍してできた研究室です。1995年度に初めて2名の卒研究生を得て農学部F棟に研究室(F401実験室とF406教授室の2室)を立ち上げました。幡山教授は公衆衛生学、大野は環境化学を専門としていたため、農学部へ移籍直後の研究テーマは「3A問題」でした。3Aとはアルミニウム(Aluminum)と酸性雨(Acid rain)とアルツハイマー病(Alzheimer's disease)の頭文字3つのAに由来します。土壌からのアルミニウムの溶出と酸性雨は密接に関連しており、窒素酸化物が酸性雨の原因物質であることから環境物質と健康との関連に着目したテーマでした。当時、老年性痴呆の多くを占めるアルツハイマー病に、飲食物や医薬品、食器などから摂取されるアルミニウムが関連しているのではないかという疑いが強かったのです。そこで、日本各地の飲料水および市販各種飲料中のアルミニウム総濃度の原子吸光分析法による測定を開始しました。飲料水である上水道では、土壌からの溶出はもちろんのこと、前処理(凝集沈殿)に硫酸アルミニウムやポリ塩化アルミニウムが使用されており、微量のアルミニウムイオンが混入する恐れがあります。飲料水中のアルミニウム濃度の基準は、ヨーロッパ諸国では最大許容濃度を0.2ppm、日本ではガイドラインを0.2ppmに定めています。しかし、調査した範囲では、日本各地の飲料水中の総アルミニウム濃度は、このガイドラインより大体においてかなり低いことがわかりました。一方、アルミ鍋を使って、通常の調理条件で30分間沸騰させると200ppmものアルミニウムが溶け出すことがわかりました。しかし、実際にはどのような化学形態のアルミニウムが体内に吸収されるかは十分に解明されてはいません。翌年度からは大学院生(修士)を迎え入れ、卒研究生の人数も増えたため、生体微量成分元素に関する研究テーマを拡大しました。「各種飲料中のアルミニウムの化学形態解明」「牡蠣加工食品中の微量金属元素分析」「コンブの食物繊維の機能解明」などで、一部のテーマは企業との共同研究や委託研究でした。また、「木材・竹材による工業排水中の重金属除去」や「バナジウム触媒による窒素酸化物の除去」などの環境問題をテーマとした研究も進めてきました。

その後、2007年の農学研究科発足に伴い、研究室名を環境分子物理化学研究室に改めました。環境分子とは私たちの身の周りにあって様々な機能性を有する分子のことです。環境分子と生体が関わる

重要な反応に着目し、その構造・機能相関を解明すべく、物理化学的な視点から研究に取り組んでいます。例えば、コンブ等の褐藻類に含まれるアルギン酸や果実に含まれるペクチンなどの酸性多糖類は増粘剤、安定剤として食品に添加されていますが、これらの多糖類は金属イオンと強く相互作用します。また、難消化性の食物繊維であることから、人体に有害な重金属(Cd、Hg等)を吸着して体外に排出する機能が注目されています。私たちの研究室では、分子の構造や結合の変化を敏感に検出することが可能な振動分光法を用いて研究を行っています。多糖類と重金属を含めた有害物質との相互作用について調べることで、機能性多糖類の食品含有成分としての有用性を分子レベルで明らかにすることを目指しています。

最近では光合成生物における金属元素の役割についても研究を進めています。光合成は天然のエネルギー貯蔵・環境浄化システムであり、光合成生物が進化の過程で獲得した業には人知を超えた謎が秘められています。例えば、地球生命圏の繁栄をもたらした酸素発生型の光合成生物は、遥か27億年以上も前に光を利用して水を分解する金属触媒を獲得しましたが、未だその構造や反応機構は解き明かされていません。他にも金属を利用して熱安定性を飛躍的に向上させることにより、過酷な環境で生き抜く術を見出した光合成生物もいます。このように光合成生物の機能発現において“鍵”となる金属元素の役割を明らかにするため、私たちは物理化学的・生化学的手法を用いて光合成膜蛋白質複合体と金属イオンの相互作用について詳しく調べています。

現在、大野隆(教授)と2007年11月に着任した木村行宏(助教)の2名のスタッフのもと、修士院生2名、卒研究生4名が日々、研究に邁進しています。研究室のホームページ(<http://www.edu.kobe-u.ac.jp/ans-bpc/>)も公開していますので、是非一度ご覧ください。最後に、当研究室ではより良い教育研究成果を目指して教員・学生一同ガンバって行きます。今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。



H21.9 鳥取砂丘にて 中央:大野、右端:木村

資源生命科学科

応用動物学コース

動物遺伝資源開発学教育研究分野

准教授 大山 憲二
助教 本多 健

動物遺伝資源開発学教育研究分野は、2007年に加西市の食資源教育研究センター（旧附属農場）に設置された比較的新しい研究室です。現在は、大山憲二(准教授)・本多健(助教)の2名の教員と大学院生・学部生各1名が所属しています。

われわれの研究室には大きく2つの領域があり、ひとつは動物が有する様々な有用形質を遺伝的な側面から解析・評価し、効率的に改良を進めるための研究を中心に行うものです。ただし、これは今流行りのDNA解析や遺伝生化学に分類されるものではなく、古典的で地味な響きはあるものの現実の育種改良ではまだまだ主流である統計遺伝学を基礎に、膨大なデータとコンピュータを活用した領域です。とくにわが国固有の肉用牛である和牛の集団を対象として、有用な形質がどの程度遺伝に支配されているのかといった遺伝性などの解析や改良を進めるための新たな指標や方法論について検討を行っています。また、改良の継続は同時に遺伝的な多様性の減少につながり、遺伝子のホモ化が進行することによる遺伝的劣形質の発現や近交退化をはじめとする種々の弊害を生む危険性があります。実際に和牛の遺伝的多様性は驚くほど小さいことが分かっており、経済動物として改良を継続することはもちろん大切ですが、われわれの研究室では集団の遺伝的構造の変遷や現状を常に把握し、遺伝的多様性の維持へも配慮した集団構造に関する研究も同時に進めています。

もうひとつの領域では、動物やそれを飼育する環境を実際に利用した教育研究を行っています。食資源教育研究センターでは広大な敷地を利用して、5名の畜産系技術員が中心になり100頭ほどの和牛(黒毛和種)を飼育しながら草作り・繁殖・肥育という牛肉生産のすべてが実践されています。これらを素材としてセンターの大きな使命である農場実習が行われるわけですが、この食糧生産フィールドという立地を有効に活用し、黒毛和種の繁殖・肥育をはじめとする飼養管理に関する試験など、現実の生産活動に直結した教育研究へも積極的に取り組んでいます。一例をあげると、現在所属している学生は黒毛和種の牛乳について質・量の双方の測定と解析を行っています。

黒毛和種は肉質に関する改良が重点的に行われた結果、動物として基本的な子供を産み健やかに育てる能力が低下しているのではないかと危惧されています。この研究では、子牛の哺乳前後に体重を測定することで乳量を推定し、さらに機械ではなく手搾りで牛乳を採取し分析に供しています。非常に手間のかかる研究ですが、黒毛和種の現時点での種牛能力を知るうえで貴重な知見になると確信しています。また、牛の糞尿を採取し、様々な条件下で経時的に臭気を測定し、その発生パターンを解析する研究も行っています。牛舎やその関連施設における臭気も同時に測定していて、将来的には臭気の軽減につながる形にできればと期待しています。このような生産活動に関わる試験を行う一方で、やる気のある学生は生産現場の実務でも積極的に汗を流し、街中のキャンパスでは得がたい経験を積んでいます。

これらの領域は教員の専門を表しているわけではなく、2つの領域がお互いを補完しながら研究室が一体となって教育研究活動を推進していることが特徴といえます。また、メインキャンパスである六甲の研究室とも密接に連携し、農学研究科の研究成果は積極的にセンター牛群の改良に活用されています。その代表は肉質に関する遺伝子の発見であり、センターで飼育されているすべての牛はその遺伝子型が検査され、肥育牛では詳細な生産履歴も公表し「神戸大学ビーフ」というブランドで販売されています。ご興味のある方はぜひご賞味下さい。

今年度センターには学生寮が新規に2部屋完成し、合計3部屋に拡充される計画となっています。ただし、学生は授業など六甲での用事も多く、六甲と加西間の移動にかかる所属学生の時間的・経済的負担は大きいといえます。環境面ではこのように不利な面もありますが、学生の研究や実務に対するモチベーションはそれを乗り越えるに十分なほど高く、センターでは植物系を合わせると現在12名の熱心な学生が所属しており、以前と比べると随分賑やかになった感があります。機会がありましたら、牧歌的な雰囲気は残しつつも、最先端の研究が日夜行われている活気溢れる附属農場にぜひお立ち寄りください。



食料環境システム学科 生産環境工学コース

地域共生計画学教育研究分野
准教授 長野 宇規

地域共生計画学分野は食料環境システム学科生産環境工学コースを構成する7つの研究分野の1つです。前任の星野敏先生の異動に伴い、昨年5月より長野宇規(准教授)が着任し、現在は大学院生4名、学部生1名(卒論指導4回生)が所属しています。

近代化以前の農村地域は集落を中心とした生活圏が地域の風土に合わせて成立していました。資源利用のルールも共同体により様々に決められていました。近代化が世界で急速に進んだ20世紀後半以降、世界中の農村地域は資源とその利用のルールの急速な変化に直面することとなりました。経済効率追求のあまり規格化された開発が世界各地で推し進められた結果、地域の特性は失われ、地域間の競争が生まれました。急激な変化の負の側面は環境問題や地域格差となって表れています。

地域計画学の本来の役割は、常に移ろいゆく地域の人と環境の関係を診断し、比較的長期的な視野に立って、資源利用のルール(制度)の改善を提案していくことです。これからはむしろ、地域の特性の違いをよく認識して、競合的ではなく相補的な関係を築くことが求められます。当分野名に含まれる「共生」という言葉にはそのような意味が込められていると思っております。

環境アセスメントにおいても環境管理計画においても、さまざまな手法で得られた環境情報をもとに最後に判断を下すのは人です。ですから情報の分かりやすさで判断の質も変わってきます。多様な環境情報が入手可能になり、住民参加が進んで「判断」の主体も多様になってきた今日、「分

かりやすい」情報発信が極めて重要となっています。以下に現在研究室で取り組んでいるテーマを簡単に紹介します。

1. 地球温暖化が農業生産システムに与える影響の評価

地球温暖化は気温上昇や降雨現象で天水作物に直接的な影響を与える一方で、水資源や生産システムの変化を通して灌漑農業にも影響を及ぼします。複雑な相互作用を持つ作物・土地利用・水資源の関係を、シナリオとモデリングを通して評価しています。主な調査対象地はトルコ共和国と日本です。

2. 農村環境トレーサビリティの手法開発

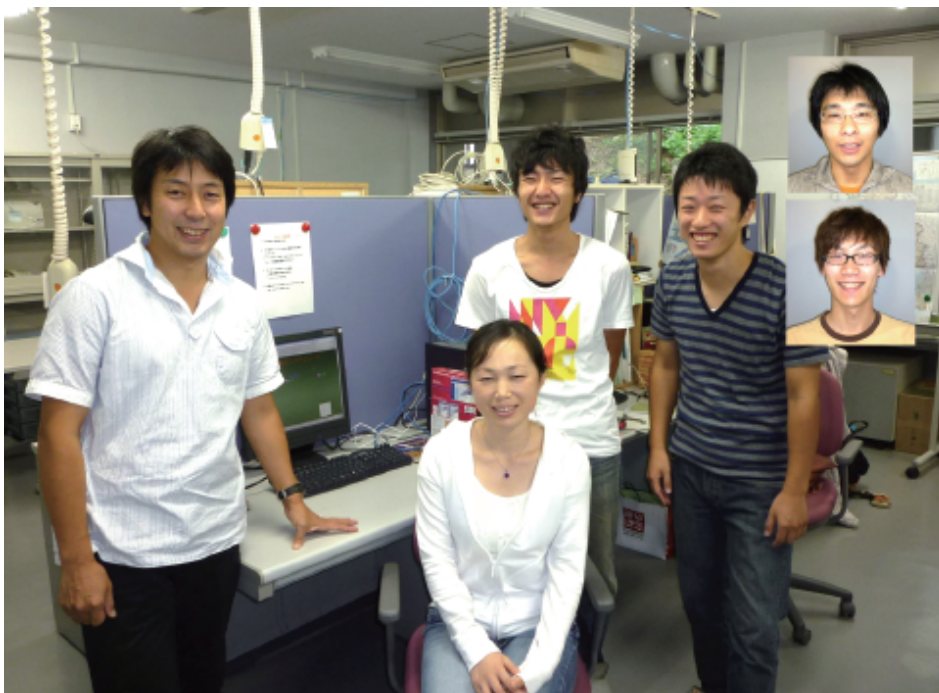
農業や農村の持続性は環境管理に強く依存します。よりよい環境管理には長期間のモニタリングを通して環境変化の兆候を捉え、適切な対策を講じることが肝要です。ただしモニタリングは一般に費用が高く、測定間隔と測定対象面積に制限があります。前者の制約に対し、比較的長期間の環境変動の指標として安定同位体と微量ミネラルを用いた環境トレーサビリティ手法の開発に取り組んでいます。また後者の制約に対してはマルチスペクトル衛星画像を用いた広域塩害診断や広域作物生育診断の手法開発に取り組んでいます。

3. 広域農村環境の指標抽出に関する研究

現在貿易グローバル化時代の新たな資源管理指標として、フードマイレージ、ライフサイクルアセスメント、ヴァーチカル・ウォーターなど、いろいろな環境指標が提案されています。当研究分野においては県レベル、列島レベルのきめ細かな資源管理と制度設計に資するような環境指標の

開発を目指しています。現時点では道路ネットワーク、農村立地、地域気象についての環境指標の開発に取り組んでいます。

今後農業・環境問題はますます深刻化していくと思われます。当研究分野では、さまざまな問題に柔軟に取り組む、かつ合意形成の局面で人から信頼される人材を輩出すべく教育を進めております。研究・教育において同窓生の皆様に大変お世話になっております。今後とも変わらぬご指導賜りますようお願い申し上げます。



食料環境システム学科

食料環境経済学コース

食料情報学教育研究分野

教授 小野 雅之

卒業生の皆様、お元気でご活躍のことと思います。

私たちの食料情報学研究分野について、ご紹介させていただきます。食料情報学研究分野が属している食料環境経済学コース(大学院では食料環境経済学講座)は、2007年度の大学院改組、2008年度の学部改組によって、それまでの植物資源学科から離れ、旧食料生産環境工学科とともに新たに食料環境システム学科(大学院では食料共生システム学専攻)を構成することになりました。

2009年度の食料情報学分野の構成員は、小野雅之教授、金子治平教授の2名の教員と、大学院生11名(博士後期課程6名、博士前期課程5名)、研究生3名、4回生5名、合計21名が所属しています。なお、大学院生と研究生には、インド、中国からの7名の留学生が含まれています。

ところで、神戸大学農学部・大学院農学研究科では、「農場から食卓まで(From Farm to Table)」をコンセプトにした教育・研究を行っていますが、農(農業者、農業生産、農村地域など)と食卓(消費者、食生活、消費地など)を結ぶものとして重要な役割を果たしているものが、農産物・食料の流通と情報です。とくに、「農と食の距離の拡大」が指摘されている現在では、農産物・食料の流通のあり方や、情報の利活用や共有のあり方が、ますます重要な意味を持つようになっているといえます。

食料情報学分野の教育・研究は、このように今日、「農場から食卓まで(From Farm to Table)」の教育・研究において重要性を増している農産物・食料の流通に関する教育・研究と、食料・農業に関連する情報に関する教育・研究の二つの柱からなっており、前者を小野教授が、後者を金子教授が主として担当し、次のような研究を行っています。

小野教授は、急激に進んでいる食品小売業の再編のなかで、食品小売業のマーチャライジングが食料・農産物の生産・流通に与える影響や、それに対する産地・農業者の対応方向や農協の役割について、統計情報やインターネット情報の利用や実態調査

などに基づいた研究を行っています。なかでも、米と青果物を対象に、消費者の食料消費の変化や食料・農業政策の変化のもとでの流通の変容と産地マーケティングの展開方向や、青果物の卸売市場の今後のあり方について、産地・農協や流通業者、卸売市場などの実態調査などに基づいて研究を進めています。

金子教授は、食料消費・摂取統計や地域別統計を対象として、食料・農業政策の立案や政策評価の基礎資料となる統計情報の真実性確保や国際比較の可能性についての研究を行っています。また、日本及びイギリスの農業・食料などの統計情報の収集過程を対象として、統計情報の作成過程と、その背景としての国家・社会・政治状況との歴史的な文脈について研究を進めています。さらに、近年、食の安全・安心を脅かす事件が多発しているなかで、食品安全行政のあり方と食料の安心に関する情報活用のあり方についての研究も進めつつあります。

また、小野教授は、東アジアにおける生鮮食料品流通システムの変化と農民組織の形成・展開過程に関する比較研究を、日本、中国、韓国、台湾の実態調査などによって進めており、金子教授は、インドにおける有機農産物および有機農薬であるニームの農民への普及過程について研究を進めつつあります。これらの研究を進めるに当たっては、海外の大学や研究機関と交流・連携するとともに、留学生が大きな役割を果たしています。

卒業生の皆様も、神戸大学を訪問された際には、ぜひ私たちの研究室にもお立ち寄り下さい。



食料環境経済学講座2008年度学位記授与式

生命機能科学科
環境生物学コース

植物栄養学教育研究分野
教授 枚本 敏男

六篠会会員の皆様方にはご健勝のこととお慶び申し上げます。

私たち、植物栄養学教育研究分野の紹介をさせていただきます。

(歴史)

植物栄養学教育研究分野は昭和24年に開設された兵庫農科大学に昭和26年に増設された農芸化学科土壤肥料学講座として誕生しました。その後、昭和29年に土壤肥料学が土壤学と肥料学に分離されて以来、現在までの半世紀の歴史を持っています。昭和43年には、講座名を植物栄養学とし、平成5年の学部改組で植物の生育(一次生産)についての技術や環境についての教育研究を基盤とする研究室(農芸化学科からは植物栄養学と土壤学、旧植物防疫学科からは植物遺伝学、農薬生化学、昆虫科学、植物病理学、旧園芸農学科から熱帯有用植物学)が集まり、生物環境制御学科を構成していました。平成18年の大学院改組、平成20年の学部改組により現在の所属(大学院は農環境生物学コース、学部は環境生物学講座)となり、現在に至っています。教員として、昭和40年以降は、伊沢、岡本、志賀、王子、脇内、末吉先生のもとに、多数の大学院生や学部の卒論生の方々が巣立られ、社会の色々な分野で活躍されています。

(現在の植物栄養学)

ヒト(従属栄養生物)は、植物などの光合成生物(光独立栄養生物)が環境中にあった無機物から太陽エネルギーを利用して作り蓄えた有機物(石油や食糧)を消費し、二酸化炭素などの無機物として排出し、人口を増やすと共に生活を向上させて来ました。その結果として、様々な環境問題に直面している現在の世界では、人口増加と環境汚染に対する解決策を見つけることが喫緊の課題となっています。そのためには、ヒトの二酸化炭素の排出量を減らすと共に、植物などの光合成生物による二酸化炭素の固定量の維持・増強が肝要です。植物栄養学という学問は、20世紀の窒素や炭素などを大量に排出した時代から、省資源、資源循環型社会へ移行していくために必要な植物の機能(無機物→有機物)を向上させるために重要な役割を求められている研究

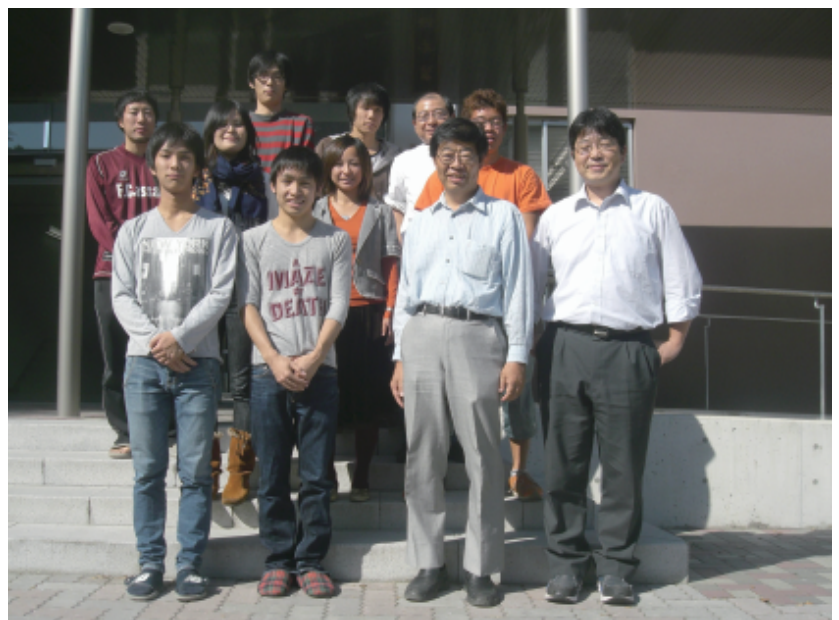
分野です。

このような観点から、本学の植物栄養学教育研究分野では、健全な状態の植物がどの様に生育しているか、また、どのような因子が植物の生育に関わっているかを調べること、すなわち、正常な植物の機能(光合成、窒素代謝)を理解し、その生育を向上させ、同時に環境浄化が達成出来るための教育と研究を行っています。具体的には、光合成における光エネルギーの変換過程の諸問題の解明とそれを基にした植物機能の向上に関する研究(三宅准教授)、硝酸イオンなどの無機態窒素の同化機構の制御因子の解明とそれを基にした環境中硝酸イオンの浄化に関する研究(白石助教)、窒素肥料による穀物種子品質制御に関する研究(杉本)を行っています。

平成21年10月時点で、集合写真をご覧くださいとおわかりいただけますが、教員3名と修士学生5名、4年生4名、3年生5名が在籍しており、現在の農学部の研究室としてはこじんまりとしています。

諸先輩の努力で維持・発展してきた農学部・農学研究科の一翼を担って、今後とも、植物栄養学の教育研究を通じて、世の中の基盤をより強固に出来る人材を輩出できればと念じています。同窓会の諸先輩の皆様方から、ご指導ご鞭撻をいただきたく紙面を借りてお願い申し上げます。ご意見等をいただければ幸いです。

(メールアドレス: sugimoto@kobe-u.ac.jp)



平成20年度庶務報告

平成20年度の一般事業として入学者記念品贈呈、会費納入促進、会報発行、各支部活動・学友会・KUC援助、農学部援助、六甲祭援助、六甲山マラソン大会援助、退職教員記念品贈呈、手提袋贈呈、卒業祝賀会援助、慶弔関連などを行いました。また、農学部の学術講演会援助として、「植物機能化学」・「花卉野菜園

芸学」・「土壌学」・「園芸保蔵利用額」・「生物機能開発科学」の教育研究分野主催学術講演9件に対して、援助を行いました。

平成21年度についても、例年同様、一般および学術振興事業活動を維持していくことが総会で承認されましたので、それに基づき現在活動しているところです。

学術講演会援助

教育研究分野	開催日	講演題目(講演者)	参加数
植物機能化学	2008/05/07	Prosopis: Experience, lessons learned and the way forward in Sudan (スーダン科学技術大学, Abel Gabar El Tayeb Babiker 教授)	20名
花卉野菜園芸学	2008/06/05	Crassulacean acid metabolism(CAM): a photosynthetic adaptation of water deficit (米ネバダ大学, John C. Cushman 教授)	30名
土壌学	2008/06/11	POPs 吸収物の作成・品種間比較と吸収制御技術(農業環境技術研究所 有機化学物質研究領域 大谷 卓博士)	26名
土壌学	2008/06/19	Necessity of Organic Matter on Tropical Acid Soil(ブラジル国/パラナ州農業研究所 Mario Miyazawa 博士)	20名
園芸保蔵利用学	2008/09/05	Salt and Drought Tolerance in Plants: Roles of ion homeostasis and metabolic adaptation (米カリフォルニア大学 Eduardo Blumwald 教授)	43名
生物機能開発化学	2008/09/08	The AhR and Human Health: how this mysterious dioxin receptor can affect your health? (米カリフォルニア大学 Fumio Matsumura 教授)	45名
生物機能開発化学	2008/12/02	Protein secretion in Bacillus species: Differential substrate specificity between the primary and secondary translocases of Bacillus anthracis (Institute for Cell and Molecular Biosciences, Faculty of Medical Science, Newcastle University Colin R. Harwood 教授)	60名
土壌学	2008/12/03	イネの生産性の向上に向けて～個葉光合成の改善とシンクの拡大～ (東北大学大学院 農学研究科 植物栄養学研究室 牧野 周教授)	30名
生物機能開発化学	2009/03/30	Flavonoids and Cardiovascular Health: More Than Antioxidants (西オーストラリア大学 Kevin David CROFT 教授)	25名

役員

会長(学友会)	北浦 義久 (兵 A 6)	理事(副代表理事)	武 正興 (神 C 3)
副会長(KUC)	能宗 康夫 (兵 C 2)	理事(名簿)	菅原 通直 (神 C 4)
副会長(学友会)	王子 善清 (兵 C 1 2)	理事(会報)	相野 公孝 (神 P 1 2)
副会長(代表理事/KUC)	中村 直彦 (神 Z 1)	理事(庶務)	橋本 堂史 (博後H 1 4年卒)
副会長	伊藤 一幸 (神 A 4)	理事(会計/会報)	宇野 雄一 (博後H 8年卒)
副会長	橋本 宏之 (神 Z 7)	監事	辻 莊一 (兵 Z 1 2)
副会長	三浦 恒夫 (神 A 9)	監事	外山 眞理 (神 C 8)
理事	大西 成己 (鶴 3)	顧問(学友会)	西川 欣一 (兵 A 1)
理事	阪上 昭宏 (鶴 3)	顧問	東 順三 (兵 C 1)
理事	三木 啓造 (兵 Z 9)	顧問	田中 平義 (兵 C 1)
理事(ホームカミングデイ)	山本 博昭 (兵 A 1 2)	顧問	新家 龍 (兵 C 5)
理事(KUC)	石賀 暢一 (神 C 1)		

六篠会代議員

松浦 良彦 (兵 A 1)	西尾 司 (兵 Z 1 6)
安尾 勲 (鶴 2・兵 C 5)	中西 三生 (兵 Z 1 7)
土佐 正 (鶴 4・兵 A 7)	得丸 哲士 (神 Z 2)
財田 福雄 (鶴 5)	松本 幹夫 (神 A 3)
小田垣博三 (兵 A 9)	矢代 学 (神 P 1 0)
酒井 修 (兵 A 9)	門岡 織江 (神 P 1 7)
住田 昭男 (兵 Z 1 0)	八木 剛 (神 P 2 2)
坂井 永利 (兵 A 1 2)	鈴木 武志 (神 C 2 3)
永吉 照人 (兵 A 1 3)	岸谷 靖雄 (兵 A 1 0) 関東支部長
置塩 康之 (兵 A 1 4)	長谷川信弘 (兵 C 1 6) 東海支部長
松井 功 (兵 T 1 6)	番匠 宏行 (兵 Z 1 3) 広島支部長

慶弔記録

退職および着任された先生方をお知らせします。(敬称略)

●定年退職された教員(平成21年3月31日退職)

青木 健次 (応用生命化学)
岡山 高秀 (応用生命化学)
金澤 洋一 (応用植物学)

●着任された教員

石川 亮 (応用植物学)
上田 修司 (応用生命化学)
坂本 克彦 (農環境生物学)
水谷 正治 (応用生命化学)

慶弔記録

以下の方々をご逝去なされました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(敬称略)

荒木 澄 (旧職員)	津田 安啓 (兵 C 8 回・鶴 5)
河本 正彦 (旧教官)	栃木 亨 (旧職員)
貴田 正義 (兵 C 2)	藤本 和義 (修 4)
恋田 一馬 (神 C 2 4・修 2 2)	松尾 達義 (鶴 2・旧職員)
小谷 克也 (兵 A 7)	水澤 健治 (兵 Z 8)
鈴木 貴博 (神 C 2)	村原 穰 (兵 A 5)
諏訪由美子 (神 P 4)	森田 忠利 (鶴 5)
高田 紀夫 (兵 A 1 4)	山口 美治 (鶴 3)
竹内 敏文 (鶴 4)	

平成20年度事業報告・決算

平成21年度事業計画・予算

六篠会 平成20年度一般会計決算

収入	9,943,043円
支出	5,573,434円
残高	4,369,609円

■収入の部

項目	予算額(円)	決算額(円)	増減(-:減)	備考
入会金	7,000,000	7,061,160	61,160	40,000円×178名 (振込手数料58,840円)
雑収入	1,000	13,592	12,592	普通預金口座利息及び名簿販売
前年度からの繰越金	2,868,291	2,868,291	0	
合計	9,869,291	9,943,043	73,752	

■支出の部

項目	予算額(円)	決算額(円)	増減(-:減)	備考
農学部援助金	550,000	610,420	60,420	構内整備費、振込手数料
一般事業費				
会報発行費	1,500,000	1,170,911	-329,089	年一回(約8,000部)
各種活動援助費	700,000	317,045	-382,955	支部活動、学生活動支援
卒業記念祝賀費	350,000	300,000	-50,000	祝賀会援助、紙袋代
卒業生名簿等管理費	100,000	98,847	-1,153	
代議員総会経費	250,000	151,770	-98,230	総会経費
一般事務費	500,000	630,001	130,001	事務アルバイト代、郵送料等
会議費	300,000	106,780	-193,220	理事会
旅費	100,000	20,460	-79,540	
慶弔費	250,000	156,562	-93,438	定年退職教員への記念品、電報等
交際費	230,000	144,635	-85,365	KUC活動費
褒賞費	100,000	0	-100,000	
役員活動費	550,000	360,000	-190,000	
神戸大学学友会費	120,000	110,525	-9,475	年会費、編集委員会費等
繰り出し金	2,000,000	0	-2,000,000	
予備費	2,369,291	1,395,478	-973,813	農学部創立60周年記念事業費
支出合計	9,969,291	5,573,434	-4,395,857	
次年度への繰越金	0	4,369,609	4,369,609	
合計	9,869,291	9,943,043	73,752	

六篠会 平成20年度六篠会基金決算

収入	36,793,515円
支出	180,000円
残高	36,613,515円

■収入の部

項目	予算額(円)	決算額(円)	増減(-:減)	備考
前年度からの繰越金	36,727,153	36,727,153	0	
繰入金	2,000,000	0	0	一般会計からの繰り入れ
雑収入	5,000	66,362	61,362	大口定期・普通預金利息
合計	38,732,153	36,793,515	-1,938,638	

■支出の部

項目	予算額(円)	決算額(円)	増減(-:減)	備考
学術活動援助費	400,000	180,000	-220,000	20,000円×9件
予備費	100,000	0	-100,000	
支出計	500,000	180,000	-320,000	
保留金	38,232,153	36,613,515	-1,618,638	
合計	38,732,153	36,793,515	-1,938,638	

六篠会 平成21年度一般会計予算

■収入の部

項目	21年度予算案(円)	20年度予算(円)	増減(-:減)	備考
入会金	7,000,000	7,000,000	400,000	40,000円×180名 (振込手数料)
雑収入	1,000	1,000	0	普通預金口座利息
前年度からの繰越金	4,369,609	2,868,291	1,501,318	
合計	11,370,609	9,869,291	1,501,318	

■支出の部

項目	21年度予算案(円)	20年度予算(円)	増減(-:減)	備考
農学部援助金	550,000	550,000	0	構内整備費、振込手数料
一般事業費				
会報発行費	1,500,000	1,500,000	0	年一回(約8,000部)
各種活動援助費	700,000	700,000	0	支部活動、学生活動支援
卒業記念祝賀費	350,000	350,000	0	祝賀会援助
卒業生名簿等管理費	100,000	100,000	0	
農学部創立60周年事業費				
記念事業援助費	3,000,000	0		特別会計への繰り出し
活動経費・事務費	500,000	0		実行委員活動費等
代議員総会経費	1,000,000	250,000	750,000	総会経費
一般事務費	500,000	500,000	0	事務アルバイト代、郵送料等
会議費	300,000	300,000	0	理事会
旅費	100,000	100,000	0	
慶弔費	250,000	250,000	0	定年退職教員への記念品、電報
交際費	230,000	230,000	0	KUC活動費
褒賞費	100,000	100,000	0	
役員活動費	550,000	550,000	0	
神戸大学学友会費	120,000	120,000	0	年会費、編集委員会費等
繰り出し金	0	2,000,000	-2,000,000	六篠会基金へ繰り出し
予備費	1,520,609	2,369,291	-848,682	
合計	11,370,609	9,869,291	-2,098,682	

六篠会 平成21年度六篠会基金予算

■収入の部

項目	21年度予算案(円)	20年度予算(円)	増減(-:減)	備考
前年度からの繰越金	36,613,515	36,727,153	-113,638	
繰入金	0	2,000,000	-2,000,000	一般会計からの繰り入れ
雑収入	5,000	5,000	0	大口定期・普通預金利息
合計	36,618,515	38,732,153	-2,113,638	

■支出の部

項目	21年度予算案(円)	20年度予算(円)	増減(-:減)	備考
学術活動援助費	400,000	400,000	0	
六篠賞	1,000,000	0	1,000,000	
海外渡航援助費	500,000	0	500,000	
予備費	100,000	100,000	0	
支出計	2,000,000	500,000	1,500,000	
保留金	34,618,515	38,232,153	-3,613,638	
合計	36,618,515	38,732,153	-2,113,638	

同窓会事務局の案内

会員の皆様からの本会へのご連絡をFAX、e-mailで受け付けております。住所や連絡先の変更、また本会に対するご要望、ご意見などお待ちしております。なおご連絡の際には、所属学科、卒業年次、送付物の宛名のシールの右下に記載されている個人コードを併せてお伝え頂くようお願い申し上げます。

●FAX:078-881-2752 ●e-mail:ans-rikusou@edu.kobe-u.ac.jp
●ホームページ <http://www.ans.kobe-u.ac.jp/sutugyousei/index.html>

編集後記

六篠会会員の皆様、益々ご活躍のこととお喜び申し上げます。今年も何とか会報の発行に漕ぎつけることができました。会報の発行にあたっては、執筆依頼をさせていただくのですが、編集作業の中で、欠落してしまったりする場合があります、大変ご迷惑をかけることがございます。行き届かない点にはご容赦をいただきたく存じます。多くの会員諸兄の方々に投稿いただき大変感謝しております。今回の会報の編集は、会報担当理事が公務に忙殺され、止む無く、代理で編集に関わることとなりました。とは言っても会報編集の骨格となる執筆者の割振りや執筆依頼は済んでいましたので、校正を少しだけいたしました。会報の表紙は、農学部の創立六十周年記念事業の日の風景といたしました。農学部も遠慮を越え、新たな年が始まるように思います。二〇一〇年が皆様にとって良い年となりますよう祈念いたします。

(会報担当理事一回)